小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

与良城跡

――長野県小諸市与良城跡発掘調査報告書――

1998. 3

小諸市教育委員会

小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

与良城跡

――長野県小諸市与良城跡発掘調査報告書――

1998.3

小諸市教育委員会

例　　言

1　本書は、平成９年８月６日～10月17日まで発掘調査された、長野県小諸市甲字南城に所在する与良城跡の調査報告書である。

2　本調査は、長野県小諸市建設部都市計画課の委託を受け、小諸市教育委員会が実施した。

3　本調査は、星野保彦を発掘担当者とし、有識者を調査員とし、地元の方々の御協力を得て実施した。

4　遺構実測図の作成は、次の者が行ったほか、株式会社ユーアール測量設計の協力を得た。
井出喜八、太田史夫、小野山　清、松本甲子雄、山浦　実、星野保彦

5　遺構実測図のトレースは、太田史夫が行った。

6　遺物実測図の作成・トレースは、太田史夫、星野保彦が行ったほか、鳥居　亮氏に御協力頂いた。

7　遺構・遺物の写真撮影は、太田史夫、星野保彦が行った。

8　本書の執筆は、第Ⅱ章１を小淵武一が、他を星野保彦が行った。また付篇には田中和彦先生より玉稿を頂戴した。

9　本書の編集は、太田史夫・星野保彦が行い、小淵武一がこれを校閲、監修した。

10　本遺跡の出土資料は、小諸市教育委員会の責任下に保管されている。
発掘調査および報告書作成に際しては、次の方々に御指導・御配慮・御協力を賜った。ここに御芳名を記して厚く御礼申しあげる（50音順、敬称略）。
臼田武正、小山茂太、小山岳夫、白沢勝彦、田中和彦、堤　隆、原　明芳
（関係機関）　株式会社ユーアール測量設計、長野県立歴史館、有限会社堀籠重機

凡　　例

1　各遺構の略号は、次のとおりである。

竪穴住居址――ＳＢ　竪穴建物址――ＴＡ　土坑――ＳＫ

土坑墓――ＳＸ　ピット群――ＳＡ　溝状遺構――ＳＤ

2　遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。

竪穴住居址、竪穴建物址、土坑、土坑墓、ピット群――1/80　炉址――1/40

建物址――1/100　曲輪、溝状遺構――1/200　遺構全体図――1/600

3　遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。

土器――1/4　銭貨――1/2　鉄製品――1/3　石器・石製品・砥石――1/4

石臼・搗き臼・石擂鉢――1/8

4　水糸レベルの原点は、662.224、663.093、663.719、664.260、663.471、661.881、661.649、661.150ｍである。

5　図版中、遺物の縮尺は次のとおりである。

土器――約1/4　銭貨――約1/2　鉄製品――約1/3　石器・石製品・砥石――約1/4

石臼・搗き臼・石擂鉢――約1/8

6　図版中では遺物の番号を簡略化した。例えば、第１図１は１－１と表す。

7　土層の色調は、『新版　標準土色帖』の表示に基づいて示した。

本文目次

例　　言
凡　　例
本文目次
付表目次
挿図目次
図版目次
Ⅰ　発掘調査の経緯……1
　1　調査に至る動機……1
　2　調査の概要……2
　3　調査の経過……2
Ⅱ　遺跡の概観……4
　1　遺跡の自然的環境……4
　2　遺跡の歴史的環境……4
Ⅲ　層　　序……9
Ⅳ　遺構と遺物……10
　1　建 物 址……10
　2　竪穴住居址……13
　　(1)　第1号竪穴住居址……13
　　(2)　第2号竪穴住居址……14
　3　竪穴建物址……15
　4　土　　坑……20
　5　土 坑 墓……21
　6　ピット群……23
　7　曲　　輪……24
　8　溝状遺構……24
　9　遺構外出土遺物……27
Ⅴ　総　　括……32
付編　小諸市与良城遺跡出土人骨について……34

付表目次

第1表　与良城跡とその周辺遺跡……6
第2表　竪穴建物址一覧表……22
第3表　土坑一覧表……23
第4表　土器・鉄製品・銭貨・石製品計測表……28
第5表　上臼計測表……29
第6表　下臼・茶臼計測表……30
第7表　搗き臼・石擂鉢・火で鉢計測表……31

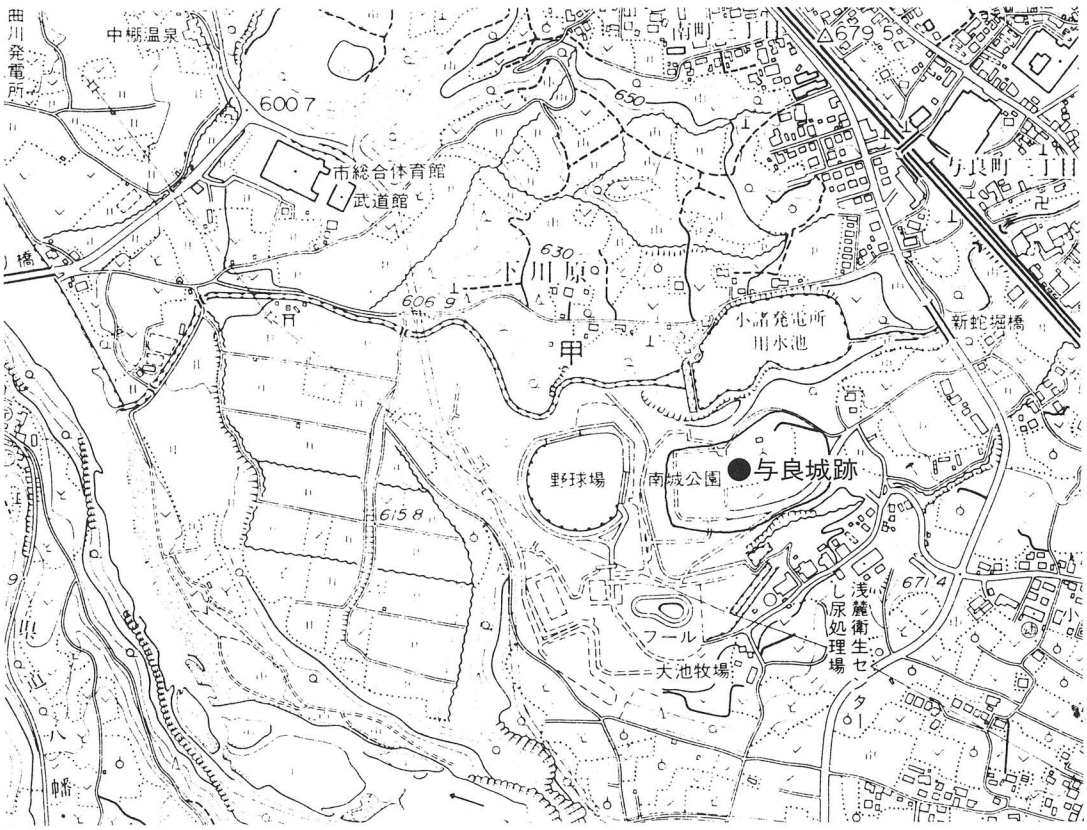
挿図目次

第1図　発掘調査地点……1
第2図　発掘調査地点と周辺遺跡……6
第3図　与良城跡遺構全体図……7・8
第4図　基本層序……9
第5図　地質分布図……9
第6図　第1号建物址抜け穴実測図……10
第7図　第1号建物址出土遺物……11・12
第8図　第1号建物址実測図……11・12
第9図　第1号竪穴住居址出土遺物……13
第10図　第1号竪穴住居址実測図……13
第11図　第2号竪穴住居址カマド実測図…14
第12図　第2号竪穴住居址実測図……14
第13図　第4号竪穴建物址出土遺物……15
第14図　第4号竪穴建物址実測図……15
第15図　第2・3・5・6号竪穴建物址実測図　…16
第16図　第7・8・9・11号竪穴建物址実測図　…17
第17図　第10・18・21・22・23号竪穴建物址実測図　…18
第18図　第12・13・15号竪穴建物址実測図　…19
第19図　第16・20号竪穴建物址実測図……20
第20図　第1・4・5号土坑実測図……20
第21図　第7・8・9号土坑実測図……21
第22図　第1号土坑墓実測図……21
第23図　第1号土坑墓出土遺物……21
第24図　第1・2号ピット群実測図……24
第25図　第1号曲輪実測図……25・26
第26図　第1号・第2号溝状遺構実測図　…25・26
第27図　第3号溝状遺構実測図……25・26
第28図　土器・鉄製品・銭貨・石製品実測図　……28
第29図　上臼実測図……29
第30図　下臼・茶臼実測図……30
第31図　搗き臼・石擂鉢・火で鉢実測図…31
第32図　第1号土坑墓出土人骨部位図……38

Ⅰ　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

小諸市建設部都市計画課では、市民の要望に応え、平成10年４月より小諸市甲字南城(1867―３外)に新たに広場を造ることとなった。同地籍は、市の中央部のやや南西に位置し、中世の与良(下河原)城跡があったとされる。計画では、城跡があったとされる丘陵状の畑の土砂を周囲のレベルまで採取した後に工事にかかるとされていた。計画通りに工事が実施されると城跡が消失するため、緊急調査の必要が生じた。これまで周辺での調査例はないが、城跡の場合、遺跡の範囲全体がさまざまな要素を持ち、意味を有するため、小諸市教育委員会では都市計画課と協議を行い、工事にかかる前に該当する範囲の全面調査を実施することとなった。また、重要な遺構等が検出された場合には再度協議することとし、平成９年８月６日より調査に着手した。



第１図　発掘調査地点（１：10,000）

2　調査の概要

○遺 跡 名　　与良城跡

○所 在 地　　長野県小諸市甲字南城1862—2、1863—1・2、1866、1867—1・3、1868、1872—1、1875—1、1877—2・7・8、1883外

○調査期間　　平成9年8月6日～10月17日

○調査に関する事務局の構成組織は下記のとおりである。

美斉津秀晴　小諸市教育委員会教育次長
小田中　茂　　〃　　生涯学習課長
小山文登　　〃　　生涯学習係長
金井利男　　〃　　生涯学習係主査
前田洋子

○調査団の構成組織は下記のとおりである。

顧　　問　関　三郎　小諸市教育委員会教育委員長
　　上野英世　小諸市教育委員会教育長
団　　長　小淵武一　小諸市文化財審議委員長
副 団 長　井出喜八
担 当 者　星野保彦　小諸市教育委員会学芸員
調 査 員　小野山　清、太田史夫、松本甲子雄、山浦　実
調査補助員　佐藤君代

3　調査の経過

調査日誌（抄）

8月6日（水）晴れ後曇り一時雨

調査対象地に残っていた矮化林檎のワイヤを切断、単管を片付けた後、北西隅より重機による表土剝ぎ、検出作業を開始する。

8月7日（木）晴れ

重機による表土剝ぎ、及び検出作業。礎石の残る建物址1棟が検出される。

8月12日（火）晴れ

調査対象地の南側の表土剝ぎ、検出作業。竪穴建物址のものと思われるプランを確認。

8月20日（水）晴れ

調査対象地南東部の表土剝ぎ（この日で重機による作業は終了）、検出作業。

8月27日（水）曇り後晴れ

竪穴建物址、土坑掘り下げ。

9月3日（水）晴れ一時曇り、夕方雨

竪穴建物址掘り下げ、実測。

9月11日（木）晴れ

調査区南側の竪穴建物址掘り下げ、実測、撮影。

9月16日（火）曇り

調査区北側の溝状遺構の掘り下げ、住居址実測。

9月24日（水）曇り後晴れ

調査区北側の溝状遺構、竪穴建物址の掘り下げ。

10月1日（水）快晴

竪穴建物址の掘り下げ、実測、撮影。

10月8日（水）晴れ

溝状遺構、全体図実測。

10月9日（木）晴れ

器材撤収、調査終了後報告書作成作業を行った。

II　遺跡の概観

1　遺跡の自然的環境

調査対象になる小諸市与良区小字南城である。この地籍は浅間山(2560ｍ)の南西に位置し、標高600～666ｍのゆるい傾斜地で浅間第二軽石流の厚い層の地である。

周囲は北東は鹿曲輪、北は谷と屏風のような尾根をはさんで田切の深い蛇堀川と川原田に接し東南は上古田、南西は下古田の小字である。

この地は東に群馬県境の山々が連なり、南には茂来山や川上村方面の山並みに続いて八ヶ岳連峰、蓼科山と続く、西は霧が峰より御牧が原台地を前景に遠く北アルプスの望める地である。

水流は前記蛇堀川（浅間山火口原の湯の平を水源）が流れ、南には蛇堀川上流で分岐した田用水がある。その水は南方の田切りの凹地を利用して、東京電力がダムを造ったが、堤が決壊し大きな被害が生じたことがあり、その流水は千曲川に流入している。

南城が調査対象になっているが、これは与良城の一部で、かつての北城（現在小諸市営野球場となっている所）があり、字名となっている鹿曲輪も城の一部である。

遺跡周辺の植生は、かつては平地林で里山であったが、養蚕の飼育が盛んになるにつれ平坦地は桑畑となり農業の変化により果樹園になり、その後は雑穀や野菜が栽培されるように変遷した。

この付近の植生は高木は、アカマツ、カラマツ、ケヤキ、クヌギ、コナラ、クリ、オニグルミ、カエデ等、低木はズミ、ガマズミ、ヤマウルシ、ヌルデ、ニシキギ、クワ等、蔓性はノダフジ、アケビ、クマヤナギ、ツルウメモドキ、スイカヅラ等がある。草木はススキ、チガヤ、ヤマハギ、キハダ、ヨモギ、ギシギシ、シロツメクサ、アカツメクサ、ホタルカズラ、ウシハコベ、スギナ、ヤエムグラ、ツリガネニンジン、フシグロ、ナンテンハギ、クサフジ、カワラマツバ、帰化植物はヒメムカシヨモギ、ヒメジョオン、ハルシオン、セイヨウタンポポ、アレチマツヨイグサ、ハキダメギク等で最近はアレチウリ、オオブタクサが非常に多くなっている。

旧来の自然植生は変化しつつある。

2　遺跡の歴史的環境

与良城跡の周囲には、縄文時代から中世にかけての遺跡が点在しているが、これまで発掘調査等が行われていないため、それぞれの内容、性質については定かでない。

このためここでは小諸市誌[(1)]の記述を引用しながら本城跡の歴史的環境をみていきたい。

市誌歴史編㈡によると与良城跡は下河原城跡ともよばれ、その起源は他の城砦同様、地域を守

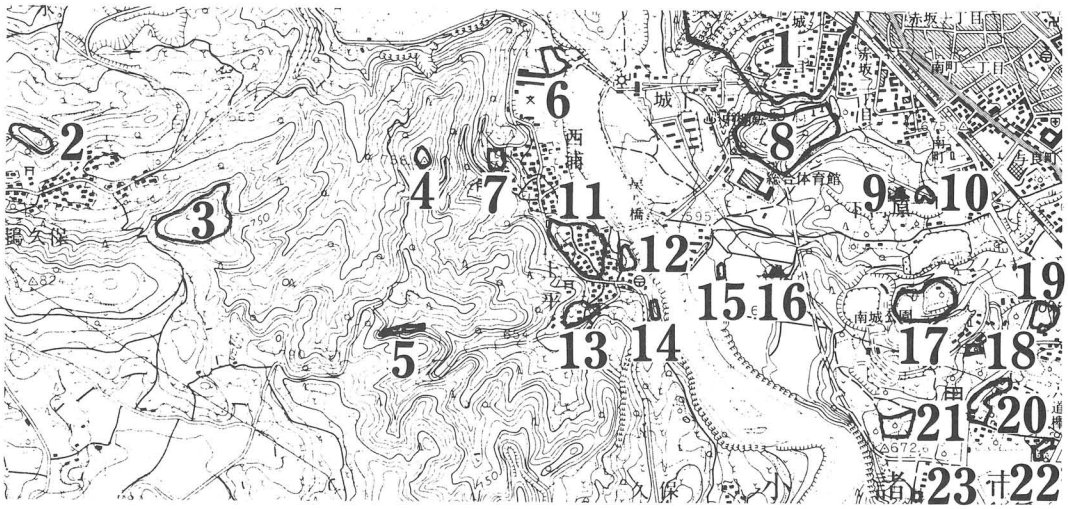
る拠点として、この地の領主により築かれたものと考えられる。「小諸温古」等によれば、「小林某の居城」とあるが、具体的にいつ築かれたかは記されていない。古書によるとここには、南城、北城の二つの城郭があったとされる。下河原の名前の由来は本城跡の北側を流れ千曲川に合流する蛇堀川の河辺に位置するためとされる。この地は、北は蛇堀川の渓谷に、南は水田地帯が続き、その先は千曲川の流れに囲まれ、古来要害を築くのに適していたようである。また、城跡の脇に、佐久、甲州から善光寺方面へ通じる古道があったことも、交通上の要衝の地を抑える意味合いから、城塞が築かれた要因と推測される。因みにこの古道沿いの北には、七五三掛城、鍋蓋城乙女城、南には、塩川城、耳取城がある。具体的にここに居城した人物として「小林氏」以後で名を遺しているのは、甲斐の武田信虎の命により信濃源氏埴科郡坂城の村上氏に備えるため差配された安田義知である。義知は先祖が甲州山梨郡安田郷の出であることにより安田姓を名乗る。安田氏は甲州を出た後、代々海ノ口城（南佐久郡南牧村）に居城していたが義知の代に小諸の高津屋城（甲字高津屋）に入り、その後武田信虎の命により下河原城に移り与良郷に「南城」を築いたとされる。上記の歴史編㈡には、高津屋城について、「武田方の狼煙台がここに設置されていたといわれる」と記されている。現代の感覚では理解し難いが、「南城」を築いた後「安田」の姓を名乗っていては目立つとの理由で、与良郷の郷名を名乗った。与良（安田）氏が、ここに居城したのは、天文23年頃（1554）から僅か数年の間だったようである。というのは、弘治元年（1555）から永禄10年頃（1567）にかけて、義知の３代後の長勝が、小室（小諸）城が落ちた後、武田氏の城下町計画の一環として、自ら与良郷の郷民に先んじて与良松井（現在の八幡神社の辺り）へ新邸を設け越し、集落も移したとされるからである。その後の調査区の周辺での出来事については市誌でふれられていない。

註

(1)　小諸市誌編纂委員会編　1924　「小諸市誌　歴史編㈡」小諸市教育委員会

第１表　与良城跡とその周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	立地	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	備考
1	小諸城跡	丁字城跡・耳取町・坂下・日影町・足柄町・大手町・鹿島裏町・馬場裏町・袋町・赤坂町・雉子原・城下(丁)・城下(乙)・城跡・三ノ門・筒井町・馬場町・摺鉢・中棚町	台地					○	○	
2	愛宕山城跡	大久保字竹ノ上	山頂					○		現存せず
3	堂平遺跡	大久保字堂平	台地					○		
4	袴腰	山浦字袴腰	山頂					○		
5	仏岩遺跡	山浦字仏岩	山麓	○						
6	西浦下平遺跡	山浦字下平	段丘	○						
7	古屋遺跡	山浦字古屋	段丘	○						
8	七五三掛城跡	甲字七五三掛	台地					○		
9	万才海土古墳	甲字万才海土	台地			○				現存せず
10	万才海土遺跡	甲字万才海土	台地				○			
11	松ケ入口遺跡	山浦字松ケ入口	段丘	○		○	○			
12	上ノ平城跡	山浦字外海道	段丘					○		
13	日向遺跡	山浦字日向	段丘	○			○			
14	堂庭遺跡	山浦字堂庭	段丘					○		
15	北菊田遺跡	丁字北菊田	段丘					○		
16	与良平古墳	甲字与良平	台地			○				現存せず
17	与良城跡	甲字南城	台地					○		
18	要畑遺跡	甲字要畑	台地				○			
19	六道Ａ遺跡	甲字六道	台地				○			
20	六道Ｂ遺跡	甲字六道	平地				○			
21	大洞遺跡	甲字大洞	台地				○			
22	六道Ｃ遺跡	甲字六道	平地				○			
23	北原田遺跡	甲字北原田	台地				○			



第２図　発掘調査地点と周辺遺跡（１：25,000）

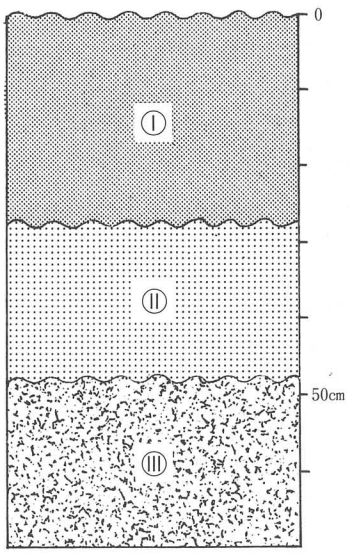
第3図　与良城跡遺構全体図（1／600）

III　層　　序

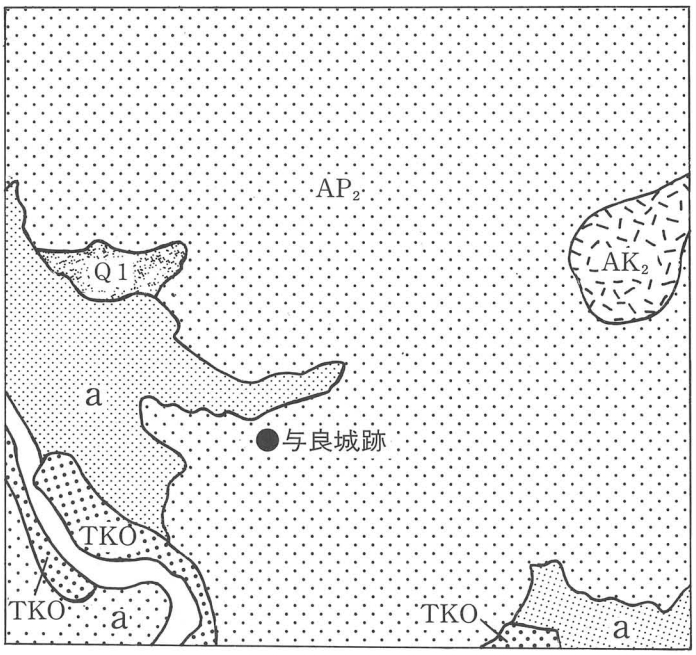
第Ⅰ　黒褐色土層（10YR3/2）ϕ0.5～4㎝のパミス、ローム粒子を含む耕作土
層厚は18～30㎝を測る。

第Ⅱ　褐色土層（10YR4/4）ϕ0.5～12㎝のパミスとローム粒子を多量に含む・

第Ⅲ　明黄褐色土層（10YR6/8）15㎝前後のパミスを多量に含む。



第4図　基本層序



AP₂　浅間第2軽石流　　AK₂　黒斑上部溶岩
a　沖積層　　橄欖石普通輝石
Q1　岩尾層　　紫蘇輝石安山岩
TKO　大杭累層

第5図　地質分布図（小諸市誌自然篇による）

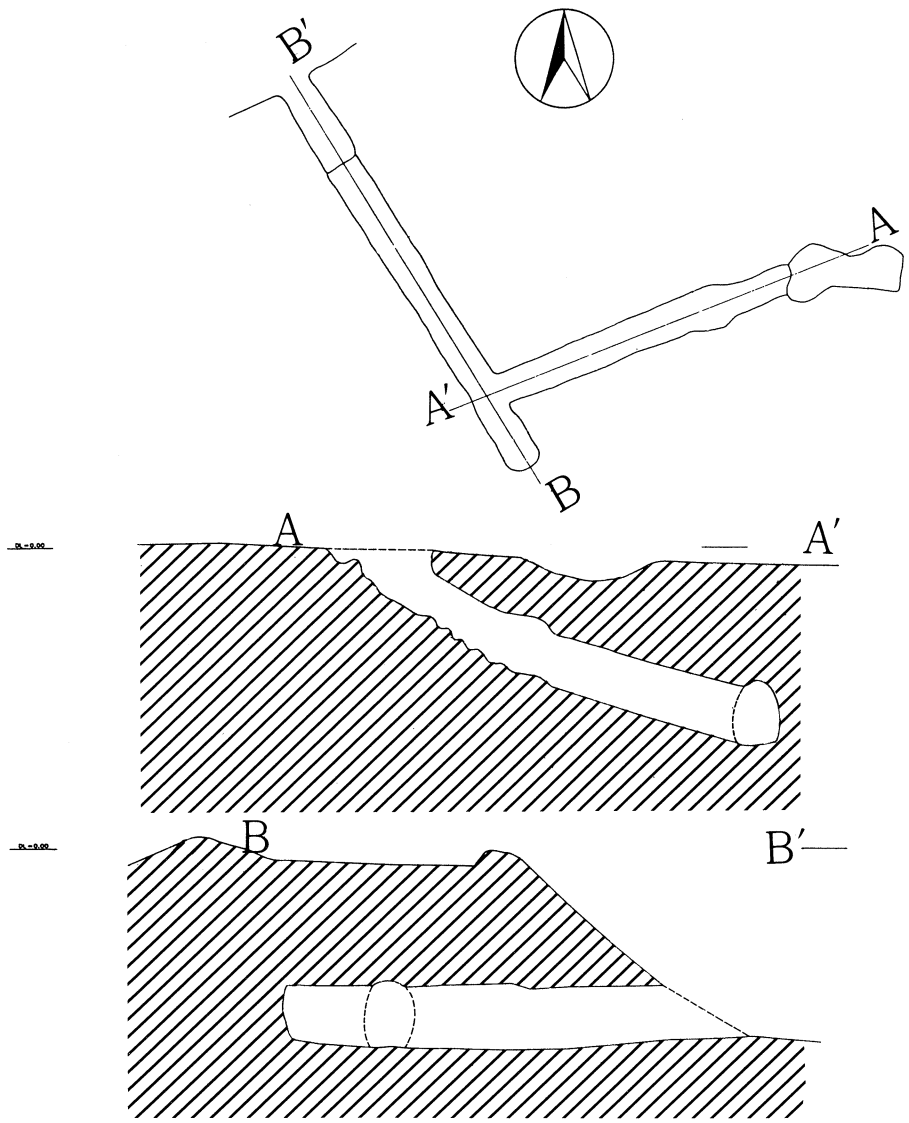
IV　遺構と遺物

1　建 物 址

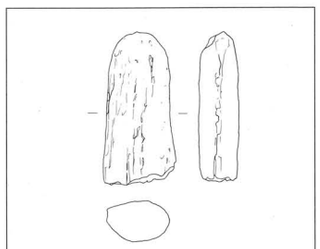
(1)　第１号建物址

遺構（第６・８図、図版１）

調査区の北西部隅で検出された。台地の縁に位置するため遺構の全容は判然としなかったが、平面形は方形を呈するものと思われる。確認出来た範囲で東西14.3ｍ、南北11.4ｍを測る。表土



第６図　第１号建物址抜け穴実測図（１：200）



第７図　第１号建物址出土遺物

区域外

抜け穴開口部

第８図　第１号建物址実測図（１：100）

水糸レベル　663.243m　0　2m

を採り去ると建物の礎石の石列が「回」の字状に検出された。外側は幅1.5～3.5m、深さ0.5～0.8m程掘り窪められた溝に、大きいものでϕ30cmを計る礫が重なるかたちで確認された。一方、内側で検出された石列はほぼ平坦な面で確認された。

この建物址の中央部の南側から西に約12m、そこから北に約10.5m続く抜け穴状の遺構が検出された。南北部の掘り込みは東西部と直角に交わる地点よりもさらに南に1.8m程続く。遺構の東西の高低差（図のＡＡ′）は開口部と、直角に曲がる突き当たり部とでは約2.8mを測るが、南北の高低差（図のＢＢ′）は殆どなかった。遺構の断面は天地が1.4～1.8m、左右が1.4mを測る楕円形を呈する。先に建物址のプランのところでも述べたが、遺構自体が斜面に位置するため南北の掘り込みは、構築時には若干調査時よりも長かったものと思われる。また、建物址の中央部南側の抜け穴の開口部についても耕作等の影響で崩落していたため当初どのような形状であったかは不明である。

遺物（第７図、図版５）

土師器片、須恵器片、内耳土器片、馬の顎の部分と思われる骨、緑泥片岩製の石剣、鉄製品（釘と思われる資料）等が出土している。図示したのは緑泥片岩製の石剣で縄文時代の所産と考えられる。なお抜け穴内で籾の灰が検出された。

2　竪穴住居址

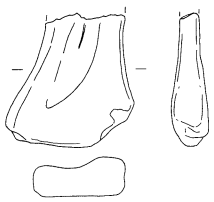
(1)　第１号竪穴住居址

遺構（第10図、図版１）

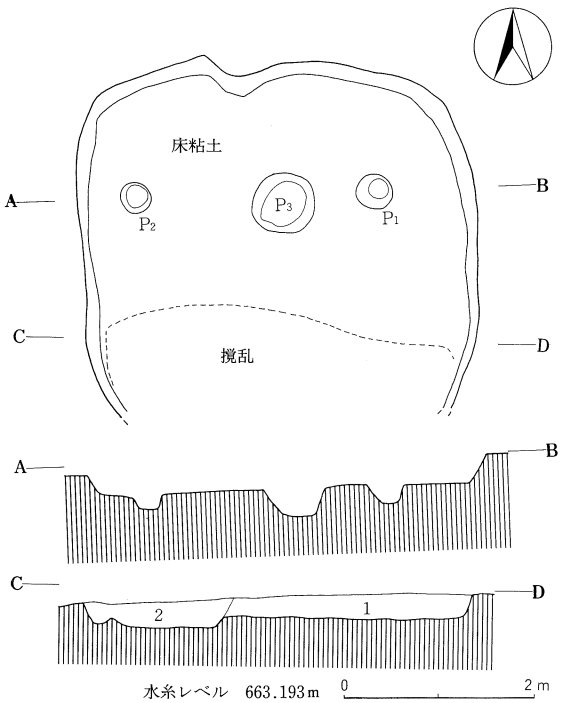
調査区中央部北側に位置する。後世の掘削等の影響で南側の壁と床面は検出されなかった。残存部で東西416cm、南北392cmを測る。壁高は、傾斜上方の北東隅で26cmを、下方の西側で20cmを測る。床面は概ね平坦だが、締まってはいなかった。ピットは３基検出され、P_1・P_2の２基が主柱穴と考えられる。カマドは検出されなかった。

遺物（第９図、図版５）

本住居址からは、土師器片、砥石、鉄滓が出土している。



第９図　第１号竪穴住居址出土遺物



層序説明
第１層　暗褐色土層（7.5YR3/3）ϕ0.5～2.0cmのパミスとローム粒子を含む。締まっている
第２層　褐色土層（7.5YR4/4）ϕ0.3～1.0cmのパミスとローム粒子を含む

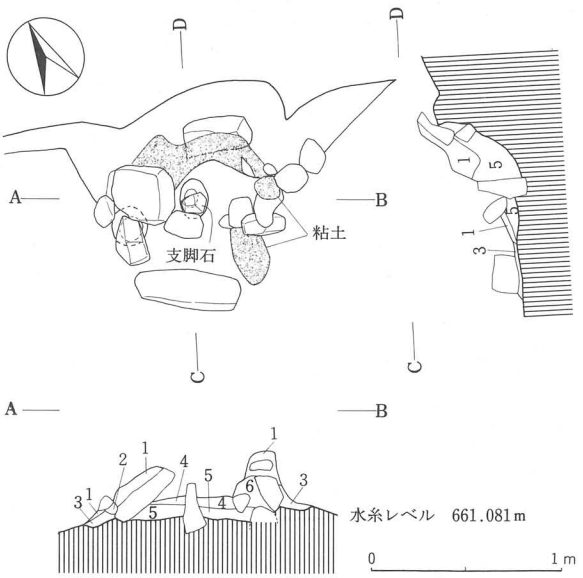
第10図　第１号竪穴住居址実測図

図示したのは砂岩製の砥石である。土師器片は大半が甕の小片であるが、図示し得なかった。本住居址の所産期は出土遺物より平安時代前期に比定される。

(2) 第２号竪穴住居址

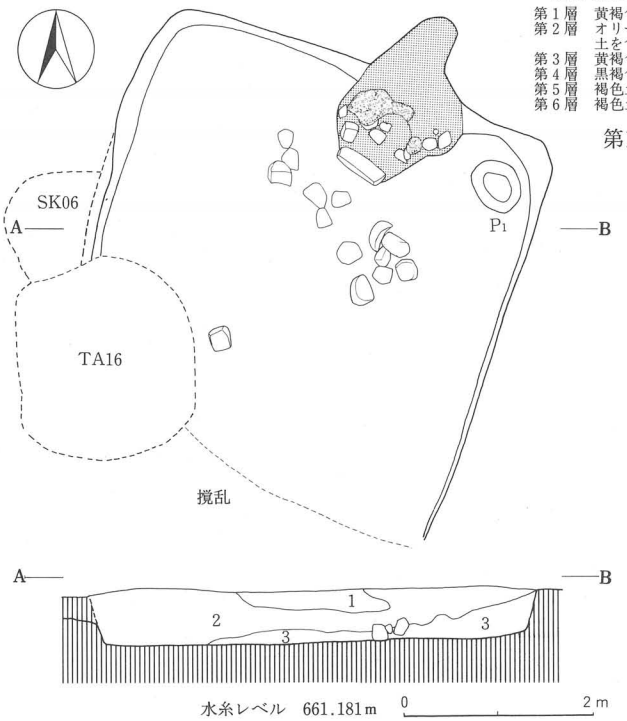
遺構（第11・12図、図版１）

調査区の南東部隅で検出された。第５・16号竪穴建物址、第６号土坑と重複関係を有し、そのいずれにも切られている。後世の掘削等の影響で南側の壁は検出されなかった。残存部で東西456cm、南北446cmを測る。壁高は、傾斜上方の北西隅で72cmを、下方の南東で50cm前後を測る。床面は概ね平坦で締まっていた。ピットは１基検出された。深さ18cmを測るが柱穴かどうかは定かではない。カマドは北側の壁の中央部より東側で検出された。軽石を芯に用い、粘土で構築したものである。



層序説明
第１層　黄褐色土層（2.5Y5/4）粘土層
第２層　オリーブ褐色土層（2.5Y4/4）φ0.3cm前後のパミスとローム粒子、粘土を含む
第３層　黄褐色土層（10YR5/6）φ0.3～0.5cmのパミスとローム粒子を含む
第４層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.3～1.0cmのパミスを含む
第５層　褐色土層（10YR4/6）φ0.5cm前後のパミスとローム粒子、焼土を含む
第６層　褐色土層（7.5YR4/4）ローム粒子、焼土を含む粘土層

第11図　第２号竪穴住居址カマド実測図



層序説明
第１層　黒褐色土層（10YR2/2）φ0.5～10.0cmのパミスとローム粒子を含む
第２層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.5～2.0cmのパミスとローム粒子、炭化物を含む
第３層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～4.0cmのパミスとローム粒子を含む

第12図　第２号竪穴住居址実測図

遺物（図版５）

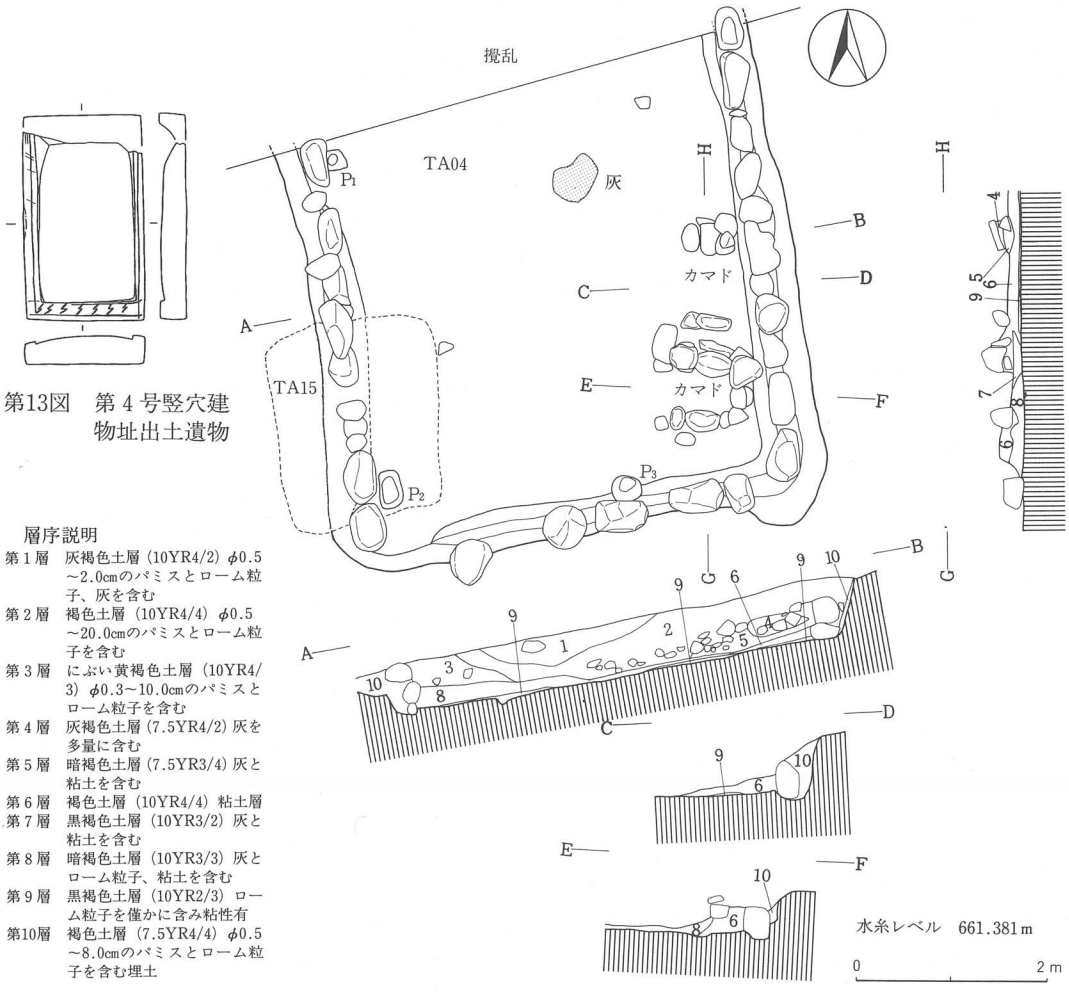
本住居址からは、縄文土器片、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄滓、軽石製の紡錘車が出土している。縄文土器は小片で摩滅が著しく拓本をとれなかったが胎土に繊維を含んでいることから前期の資料と推測される。図示しなかったが、須恵器片は蓋と甕の破片である。本住居址の所産期は出土遺物より平安時代前期に比定される。

3　竪穴建物址

遺構（第14～19図、図版１・２・３）

今回の調査では19棟の竪穴建物址が検出された。詳細は第２表に記した。このうち、第４号竪穴建物址では、検出された３方向の壁下に列状に隙間なく並べたかたちの川原石・軽石が、一方、第10・13号竪穴建物址では調査し得たすべての壁面に沿って礫・軽石による石積みが検出された。殊に第13号では遺存の状態が良好だった。ここからは、壁面に添った石積み、及び床面に崩れ落ちた石を取り除いたところ、ほぼ一定の間隔をおいて置かれた偏平な川原石が確認され、北側の壁下の中央部からは籾の灰、焼土が検出された。また、先に述べた第４号からはカマドが東の壁下に２箇所並んで検出された。この床面は周囲から中央部に向かい傾斜し、床面は粘土を多く含んだ土が貼られ締まっていた。

第13図　第４号竪穴建物址出土遺物



層序説明

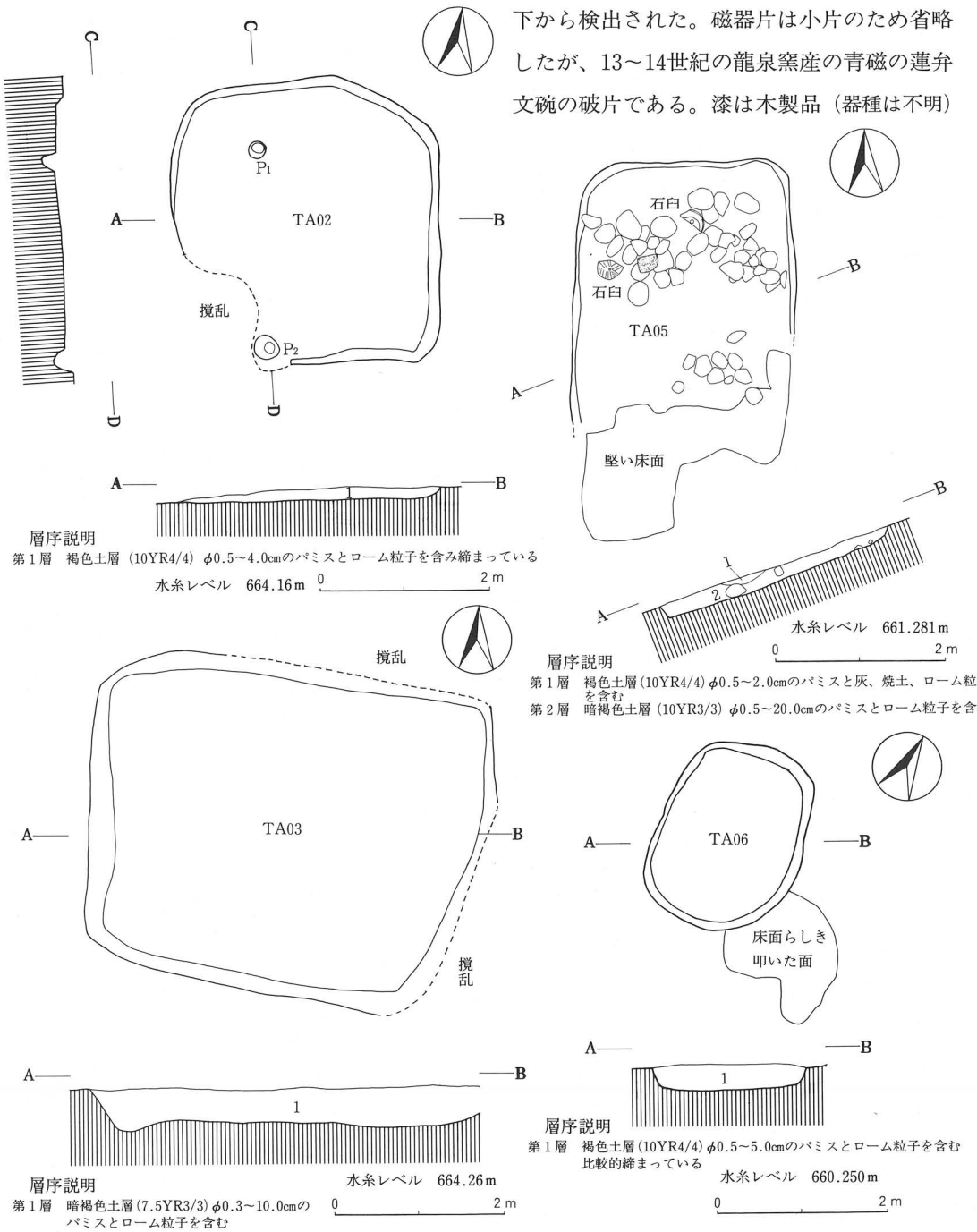
第１層　灰褐色土層（10YR4/2）φ0.5～2.0cmのパミスとローム粒子、灰を含む
第２層　褐色土層（10YR4/4）φ0.5～20.0cmのパミスとローム粒子を含む
第３層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）φ0.3～10.0cmのパミスとローム粒子を含む
第４層　灰褐色土層（7.5YR4/2）灰を多量に含む
第５層　暗褐色土層（7.5YR3/4）灰と粘土を含む
第６層　褐色土層（10YR4/4）粘土層
第７層　黒褐色土層（10YR3/2）灰と粘土を含む
第８層　暗褐色土層（10YR3/3）灰とローム粒子、粘土を含む
第９層　黒褐色土層（10YR2/3）ローム粒子を僅かに含み粘性有
第10層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～8.0cmのパミスとローム粒子を含む埋土

第14図　第４号竪穴建物址実測図

遺物（第13、28－2・7・11・12、30－5・8、31－14図、図版5・6）

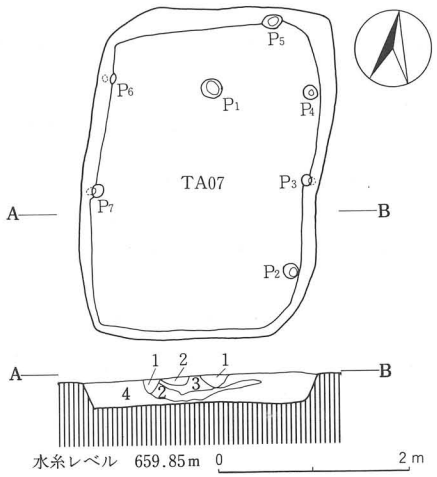
弥生土器片、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、磁器片、石斧、石製品（石臼･硯･砥石）、鉄製品（釘）、鉄滓、青銅製品（小柄の柄頭）、漆、獣骨などが出土している。

このうち図示したものには粘板岩製の硯、小柄の柄頭がある。硯は第4号竪穴建物址の貼床の下から検出された。磁器片は小片のため省略したが、13～14世紀の龍泉窯産の青磁の蓮弁文碗の破片である。漆は木製品（器種は不明）

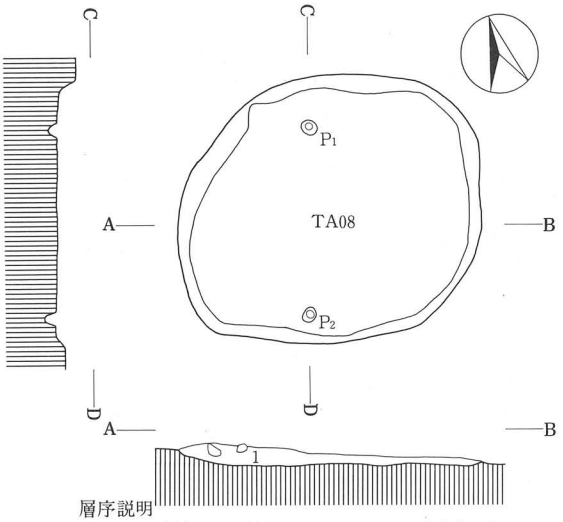


第15図　第2・3・5・6号竪穴建物址実測図

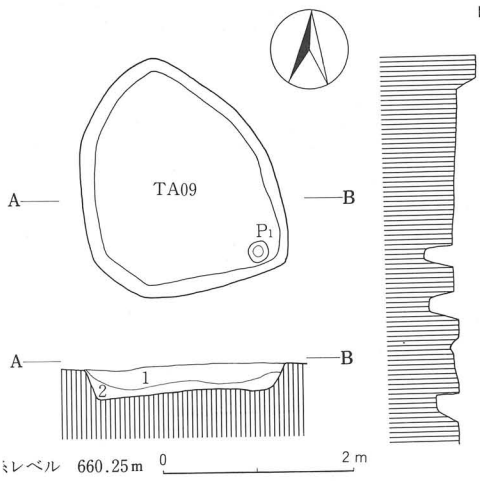
に塗布されたもので、塗られた当時は鮮やかな朱を呈していたと推測される。



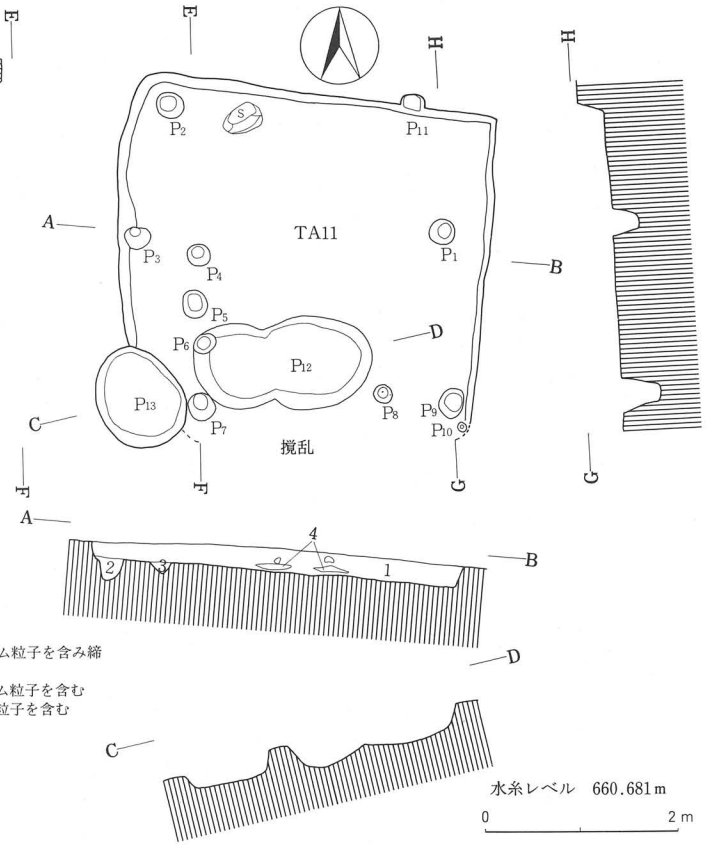
層序説明
第1層　にぶい黄橙色土層（10YR7/3）砂を含む灰層
第2層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.5～1.0cmのパミスを僅かに含み、灰を含む
第3層　褐色土層（10YR4/4）φ0.5～3.0cmのパミスとローム粒子を含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.3～1.0cmのパミスとローム粒子、灰を含む



層序説明
第1層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.5～20.0cmのパミスを多量に含み、ローム粒子を含む

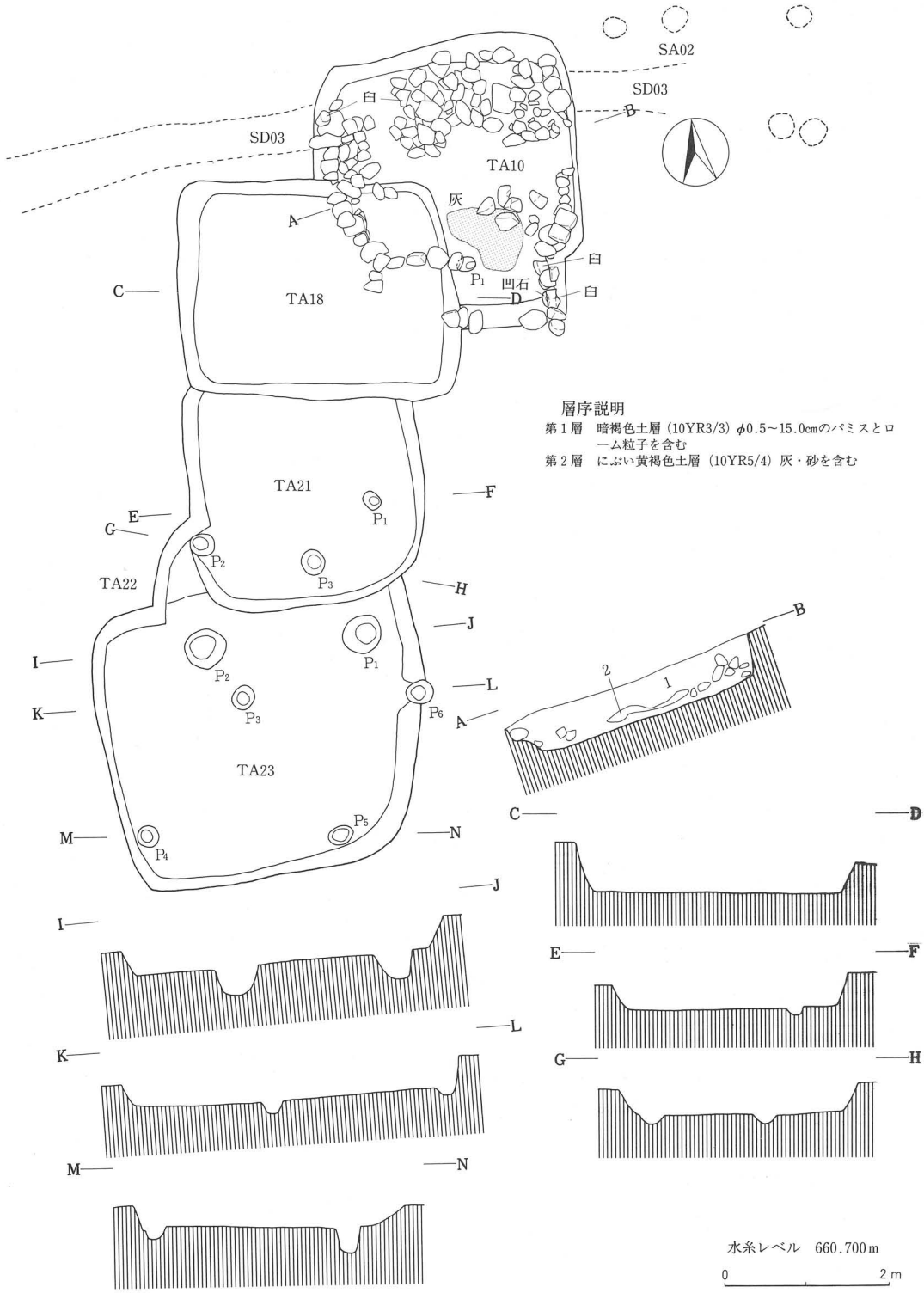


層序説明
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～10.0cmのパミスとローム粒子を含み締まっている
第2層　にぶい褐色土層（7.5YR5/4）φ0.5～5.0cmのパミスとローム粒子を含む

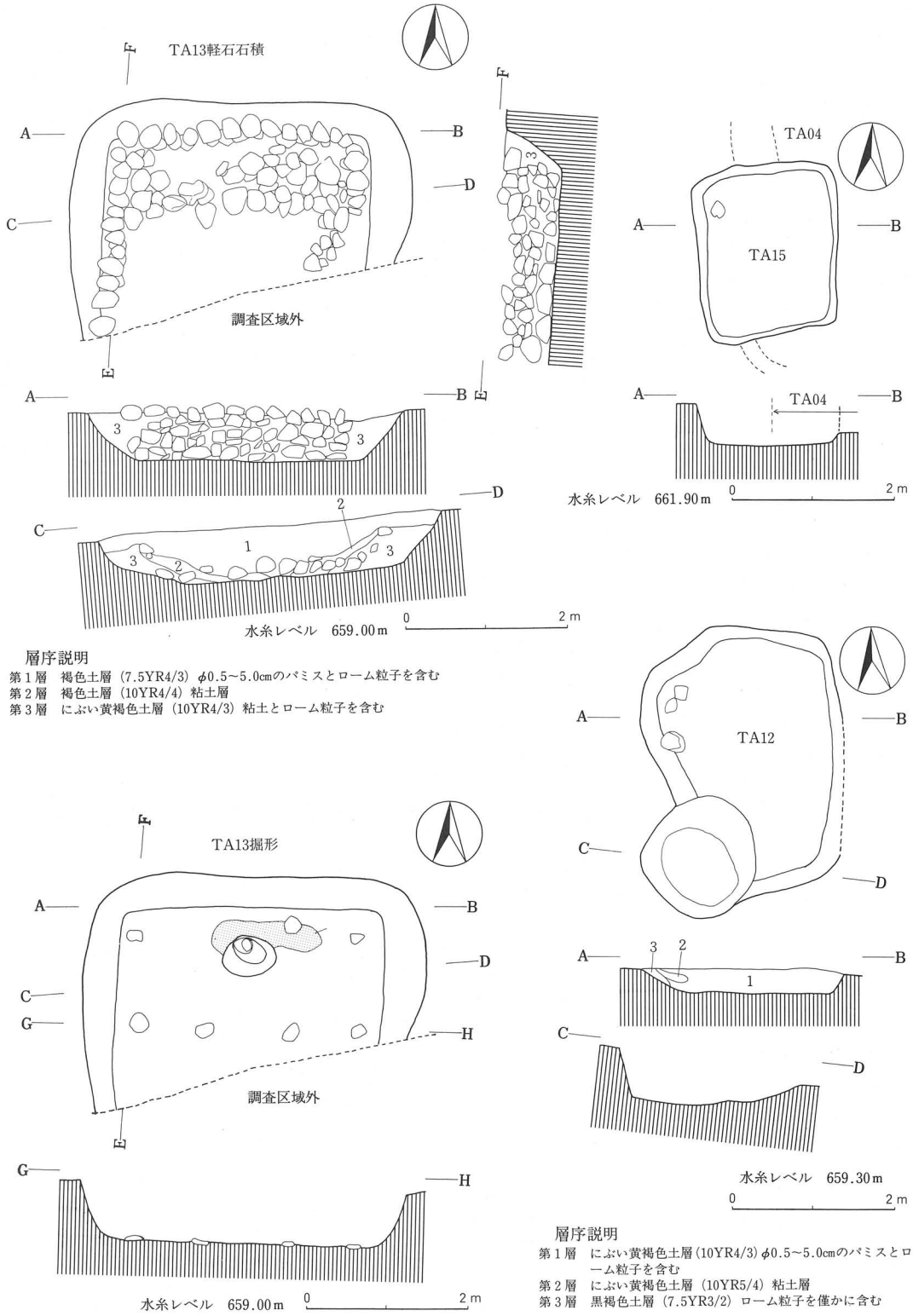


層序説明
第1層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.5～10.0cmのパミスとローム粒子を含み締まっている
第2層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.5～2.0cmのパミスとローム粒子を含む
第3層　褐色土層（10YR4/6）φ0.5～2.5cmのパミスとローム粒子を含む
第4層　黄褐色土層（10YR5/6）ロームブロック

第16図　第7・8・9・11号竪穴建物址実測図



第17図　第10・18・21・22・23号竪穴建物址実測図



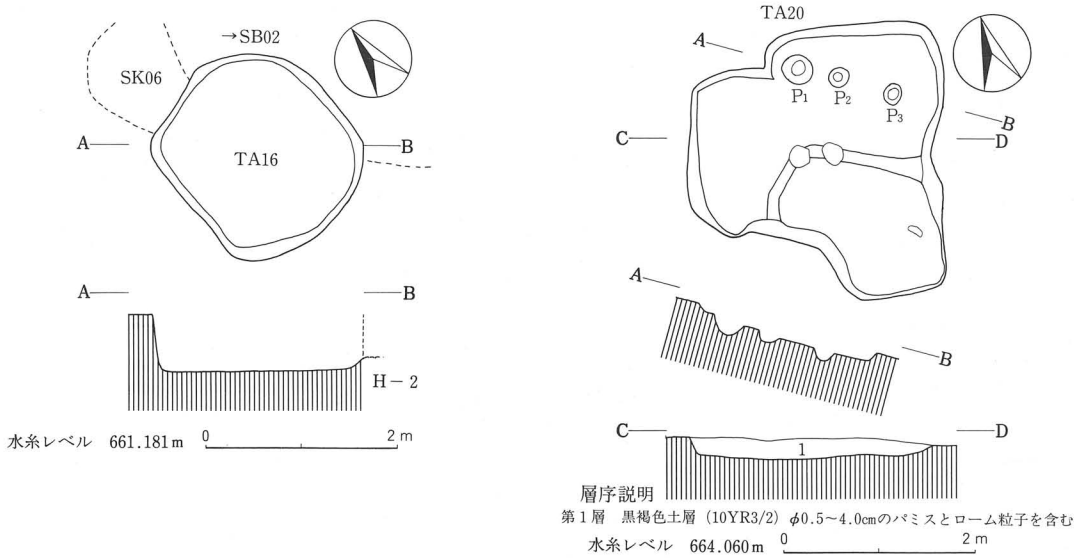
層序説明

第1層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.5～5.0cmのパミスとローム粒子を含む
第2層　褐色土層（10YR4/4）粘土層
第3層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）粘土とローム粒子を含む

層序説明

第1層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）φ0.5～5.0cmのパミスとローム粒子を含む
第2層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）粘土層
第3層　黒褐色土層（7.5YR3/2）ローム粒子を僅かに含む

第18図　第12・13・15号竪穴建物址実測図



第19図　第16・20号竪穴建物址実測図

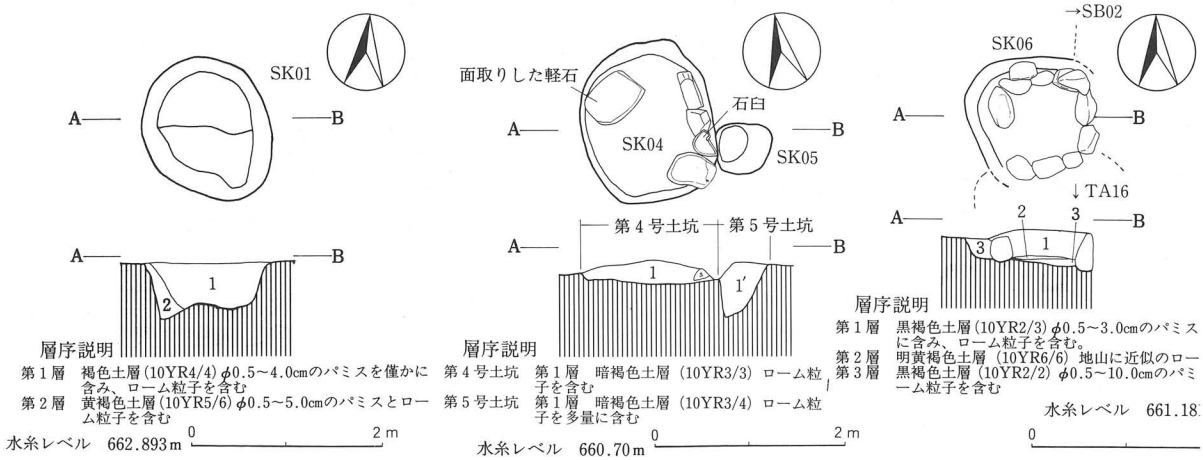
4　土　　坑

遺構（第20・21図、図版３・４）

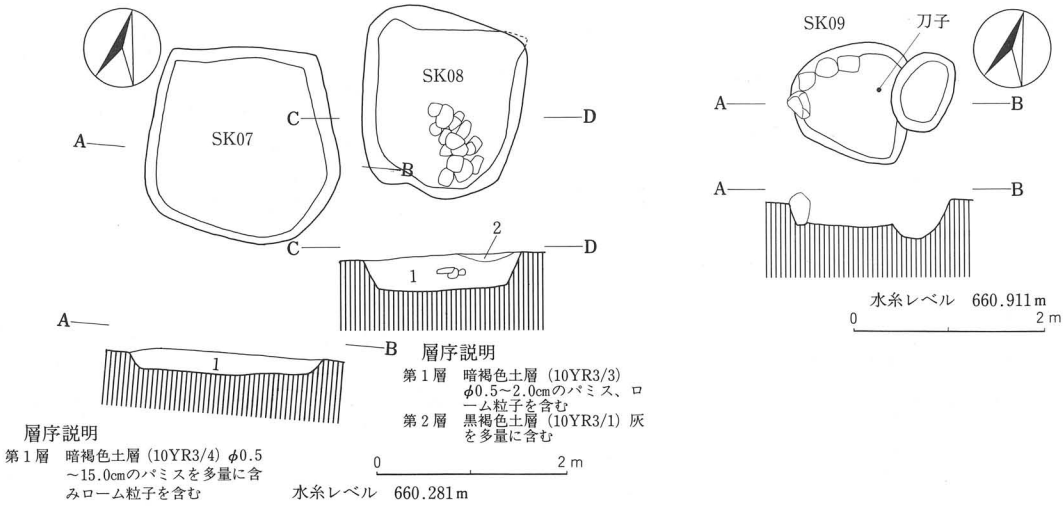
今回の調査では７基の土坑が検出された。詳細は第３表に記した。第４・６・９号土坑の底からは周縁部に沿うかたちで軽石が検出された。このうち第４号では面取りしたものが検出された。

遺物（第28－４、29－１図、図版５・６）

縄文土器片、土師器片、黒色土器片、内耳土器片、石製品（石臼）、鉄製品（刀子）などが出土している。このうち図示したものには刀子がある。縄文土器は、沈線と縄文が施文された中期後葉の深鉢の口縁部の破片である。



第20図　第１・４・５号土坑実測図



第21図　第７・８・９号土坑実測図

5　土坑墓

(1)　第１号土坑墓

遺構（第22図、図版４）

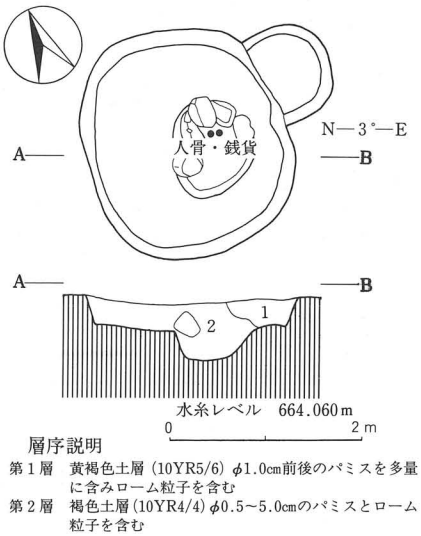
調査区の中央部で検出された。平面形は双円形を呈し、底部中央が掘り窪められていた。

遺物（第23図、図版５）

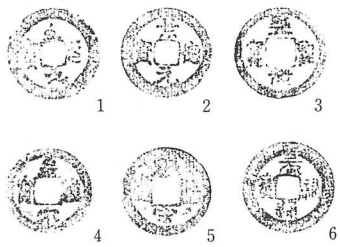
人骨と銭貨、面取りした軽石が出土している。人骨は、推定年令の10歳前後で、性別については残存状態が不良だったため特定できなかった。詳細については巻末で田中和彦先生に述べて頂いた。

銭貨は６点出土した。錆化が著しく肉眼では判読できなかったが、長野県立歴史館のご好意でＸ線透過による観察を実施したところ、２点が皇宋通寶(初鋳1038年)、残る４点は至道元寶(995年)、景徳元寶(1004年)、天聖元寶（1023年)、元祐通寶（1086年）が１点ずつと判明した。

面取りした軽石は死者を弔うため添えられたものと思われる。



第22図　第１号土坑墓実測図



第23図　第１号土坑墓出土遺物

第2表　竪穴建物址一覧表

No.	平面形	規模（cm）			長軸方位	出　土　遺　物	柱穴	備　　考
		東西	南北	深さ				
2	不整隅丸方形	314	338	16	N―9°―W	土師器片、内耳土器片	2	
3	不整方形	478	392	45	N―87°―W	土師器片、須恵器片	0	
4	隅丸方形	510	(500)	58	N―11°―W	硯、土師器片、須恵器片、内耳土器片	3	四方石列
5	不整隅丸長方形	264	312	21	N―1°―E	黒曜石片、鉄滓、土師器片、弥生土器片、須恵器片、内耳土器片、砥石、石臼	0	南下 叩いた床
6	不整楕円形	173	228	30	N―5°―W	土師器片、須恵器片、内耳土器片、灰釉陶器片、釘	0	南下 叩いた床
7	不整長方形	248	345	32	N―5°―W	土師器片、須恵器片、内耳土器片、灰釉陶器片	7	
8	不整楕円形	318	285	17	N―79°―W	なし	2	
9	不整楕円形	208	248	27	N―19°―W	土師器片、須恵器片、内耳土器片	1	
10	不整方形	322	356	52	N―1°―E	土師器片、内耳土器片、紡水車（軽石）、鉄滓、獣骨歯、漆、青磁片	1	
11	不整長方形	382	(360)	24	N―7°―E	土師器片、須恵器片、内耳土器片、鉄製品	11	
12	不整長楕円形	240	335	31	N―14°―W	なし	0	
13	隅丸方形	418	(280)	65	N―2°―W	土師器片、須恵器片、内耳土器片、小柄の柄頭	0	軽石積 礎石、川原石
15	不整方形	172	208	52	N―8°―W	なし	0	TA04と重複
16	不整楕円形	185	212	62	N―2°―W	土師器片、須恵器片、黒曜石、内耳土器片	0	SB02・SK06と重複
18	不整隅丸方形	338	271	50	N―82°―W	土師器片、内耳土器片、石斧	0	
20	不整形	255	288	22	N―7°―E	なし	3	
21	不整隅丸方形	285	(290)	35	N―1°―E	土師器片、内耳土器片	3	
22	?			29	?	なし	0	
23	不整隅丸方形	385	350	35	N―87°―E	なし	6	

※No.1、14、17、19欠番

第３表　土坑一覧表

No.	平面形	規模（cm）			長軸方位	出　土　遺　物	備　　考
		東西	南北	深さ			
1	楕円形	138	144	48	N—25.5°—W	なし	
4	楕円形	138	167	17	N—４°—W	縄文土器片、土師器片、内耳土器片、石臼、面取した軽石	
5	不整楕円形	57	54	54	N—30°—E	なし	
6	不整楕円形	(140)	(135)	35	N—15°—W	なし	軽石列が一周SB02、TA16と重複
7	不整方形	198	203	23	N—9.5°—W	土師器片、内耳土器片	
8	不整方形	167	190	37	N—10°—W	内耳土器片	
9	不整楕円形	160	124	35	N—40°—W	刀子	西側軽石列

※No.２、３号土坑欠番

６　ピット群

(1)　第１号ピット群

遺構（第24図、図版４）

調査区の南西部で検出された。４基のピットよりなる。ピット掘形の平面形は円形、不整楕円形を呈し、深さは12.5～32cmを測る。埋土は褐色（10YR4/4）を呈する。

遺物（第28－８・13図、図版６）

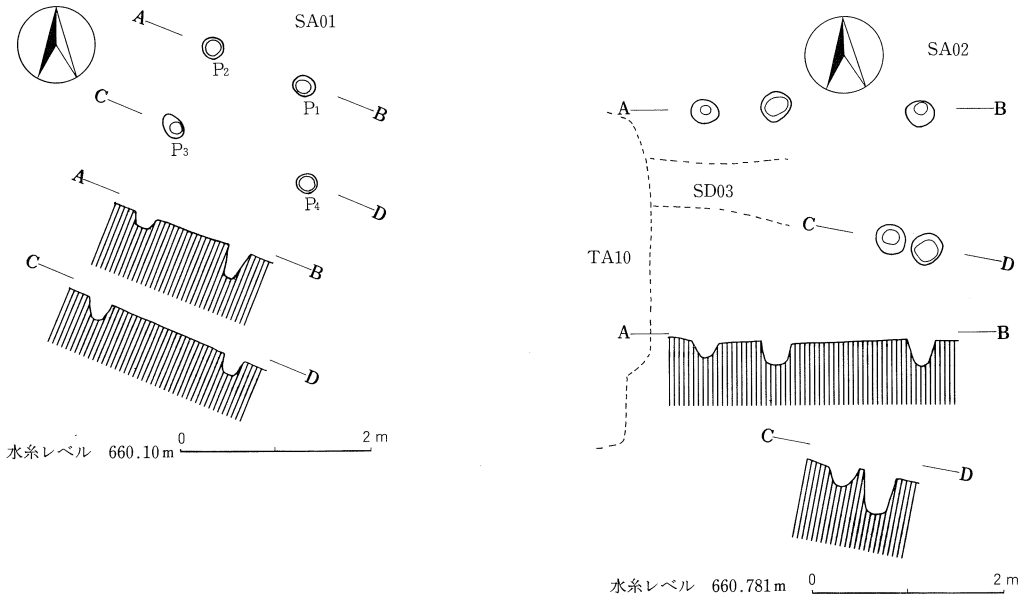
石器、石製品がP_1から出土している。図示したのは、安山岩製の石斧と、砥石である。

(2)　第２号ピット群

遺構（第24図）

調査区の南側中央で検出された。５基のピットよりなり、第３号溝状遺構の北側で３基、南側で２基検出された。掘形の平面形は、円形、不整楕円形を呈する。深さは、16～46cmを測る。埋土は、暗褐色（10YR3/4）を呈する。なお遺物の出土は皆無であった。

上記の２群に含まれるピットの外に数基のピットが調査区の南側で数基確認されたが、掘形の平面形、深さ等に規則性がみられず、また遺物の出土もなかったため省略する。



第24図　第１・２号ピット群実測図

7　曲　　輪

(1)　第１号曲輪

遺構（第25図、図版４）

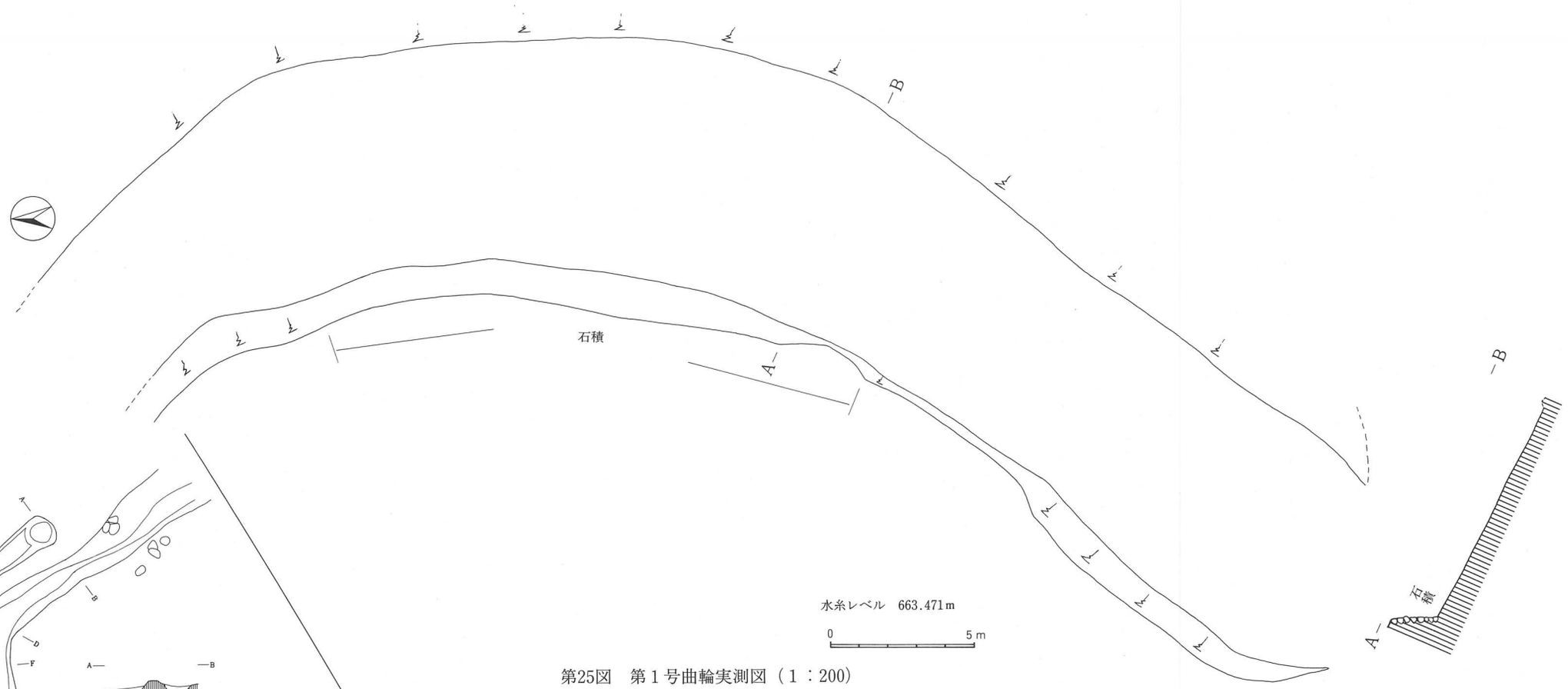
調査区の東側に位置する。規模は、幅が最も広い地点で8.4m、長さは後世の浸食等で不明瞭だが確認できた範囲で約50mを測る。他の遺構が検出された台地より一段低く、南から北に向かって緩やかに傾斜している。ピットは検出されなかった。この曲輪と上の台地との間に位置する崖に幅約17.5m、高さ1.5～2.2mを測る軽石の石積が残っていたが、堅固な造りではなく、おそらく後世になって積まれたものと考えられる。また、遺物は確認されなかった。

8　溝状遺構

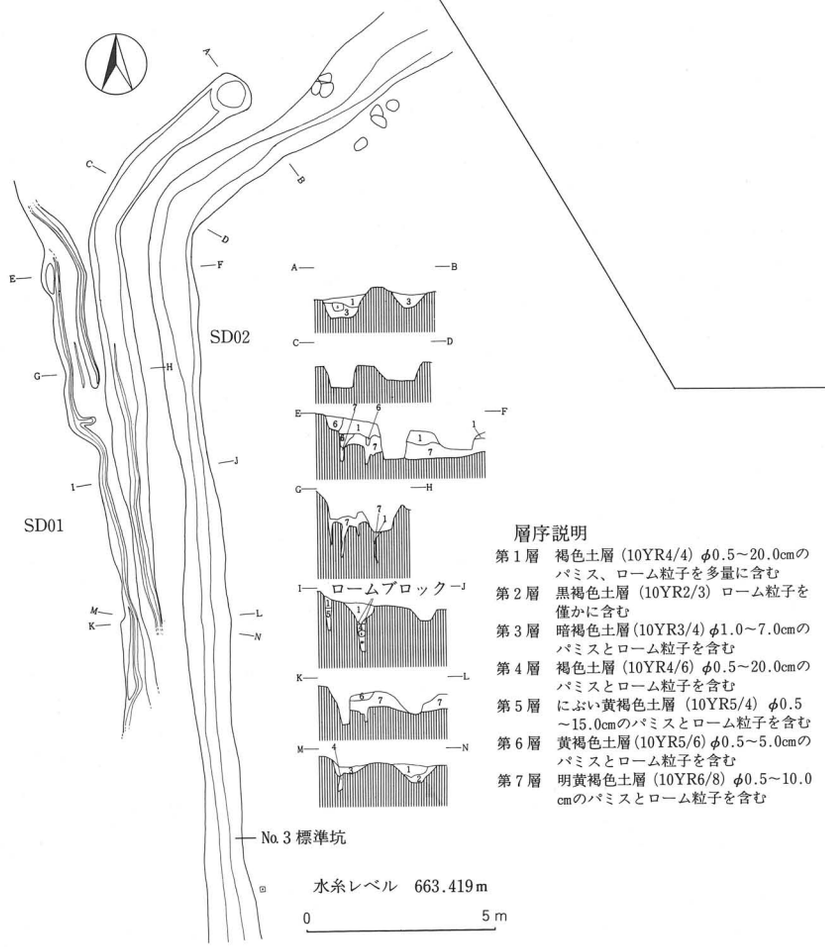
(1)　第１号溝状遺構

遺構（第26図、図版４）

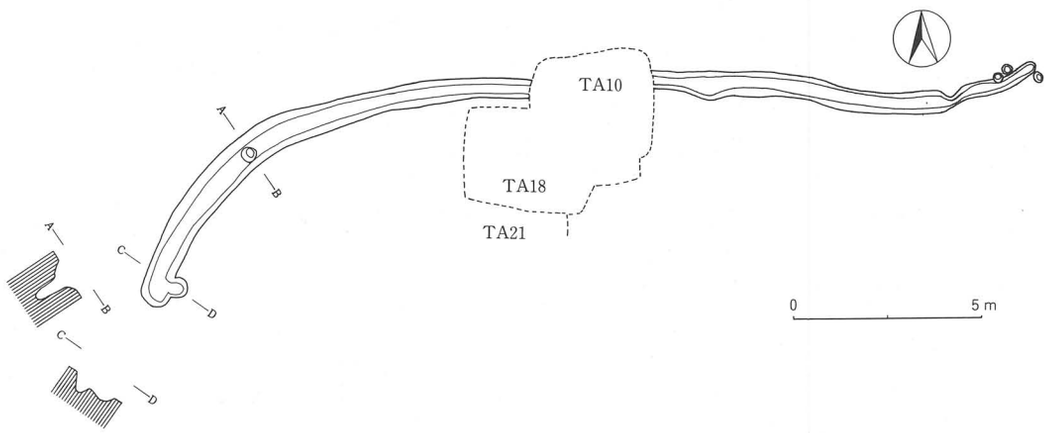
調査区の北側中央部に位置する。第２号溝状遺構と平行して検出された。調査し得た範囲で長さ約19.5m、幅2.2m、深さ2.2mを測る。耕作等の影響で全容を明らかにできなかったが、掘削当時は南北にさらに伸びていたものと思われる。特に北側は第１号建物址の付近まで続いていた可能性が窺える。断面を観察すると層序説明の３の土層が細く深く続いているが、これは一旦深くU字状に掘り下げた後に、この部分に二重の板塀の類の防御壁を建て、掘り上げておいた土を戻したためにこのような層序になったものと思われる。実際この土(層序説明３の土層に挟まれた部分）は、地山の土に類似しているが締まりはなかった。



第25図　第１号曲輪実測図（１：200）



第26図　第１号・第２号溝状遺構実測図（１：200）



第27図　第３号溝状遺構実測図（１：200）

遺物（28－３、31－12図、図版６）

内耳土器片、鉄製品、石製品が出土している。図示したものには刀子、安山岩製の搗き臼がある。

(2) 第２号溝状遺構

遺構（第26図、図版４）

調査し得た範囲で長さ約27.5ｍ、幅1.7ｍ、深さ0.8ｍを測る。第１号溝状遺構同様、全容を明らかにできなかったが、掘削当時は南にさらに伸びていたものと思われる。

遺物（第28－１図、図版５）

須恵器片、内耳土器片、土製品（鞴の羽口）、炭化した粟が出土している。図示したものには、内耳土器がある。

(3) 第３号溝状遺構

遺構（第27図、図版４）

調査区の南側中央部で検出された。東西に伸びた長さ約26.6ｍ、幅0.85ｍ、深さ0.4ｍを測る。第10号竪穴建物址とピット５基と重複関係を有し、双方に切られている。覆土はパミスを含み褐色（10YR4/4）を呈していた。

遺物（第28－９図、図版６）

土師器片、須恵器片、黒色土器片、内耳土器片、磁器片（青磁）が出土しているが、いずれも小片のため図示し得るものはなかった。

9　遺構外出土遺物

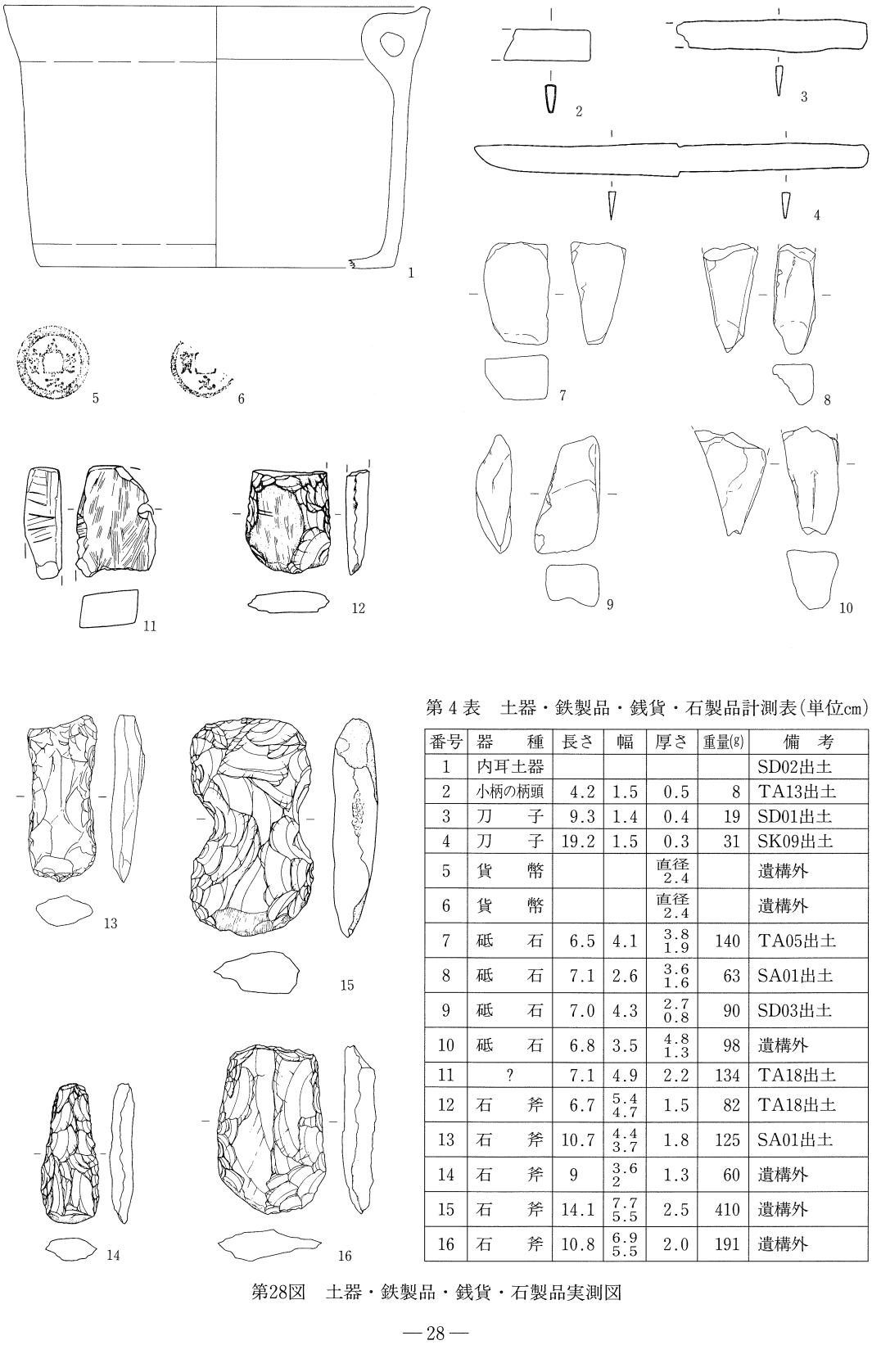
遺物（第28・29・30・31図、図版５・６）

遺構外出土遺物には土師器片、須恵器片、石製品、石器、銭貨などがある。

このうち図示したのは、石製品（砥石、搗き臼・石擂鉢、火で鉢）、石器（石斧）、銭貨である。

土器片には、縄文土器片、土師器片、須恵器片、陶器片、内耳土器片、磁器片がある。縄文土器片は深鉢の口縁部の破片で中期中葉から後期にかけての資料である。陶器片は、15世紀から16世紀の初めにかけての資料が４点出土している。いずれも灰釉が掛けられた瀬戸・美濃系陶器の破片で１点は15世紀代の古瀬戸の折縁の鉢、２点は15世紀末から16世紀初めの大窯製品の丸皿、残る１点は同時期の天目茶碗の破片である。

銭貨は２点出土し、１点は至道元寶、１点は欠損していたため判別できなかった。

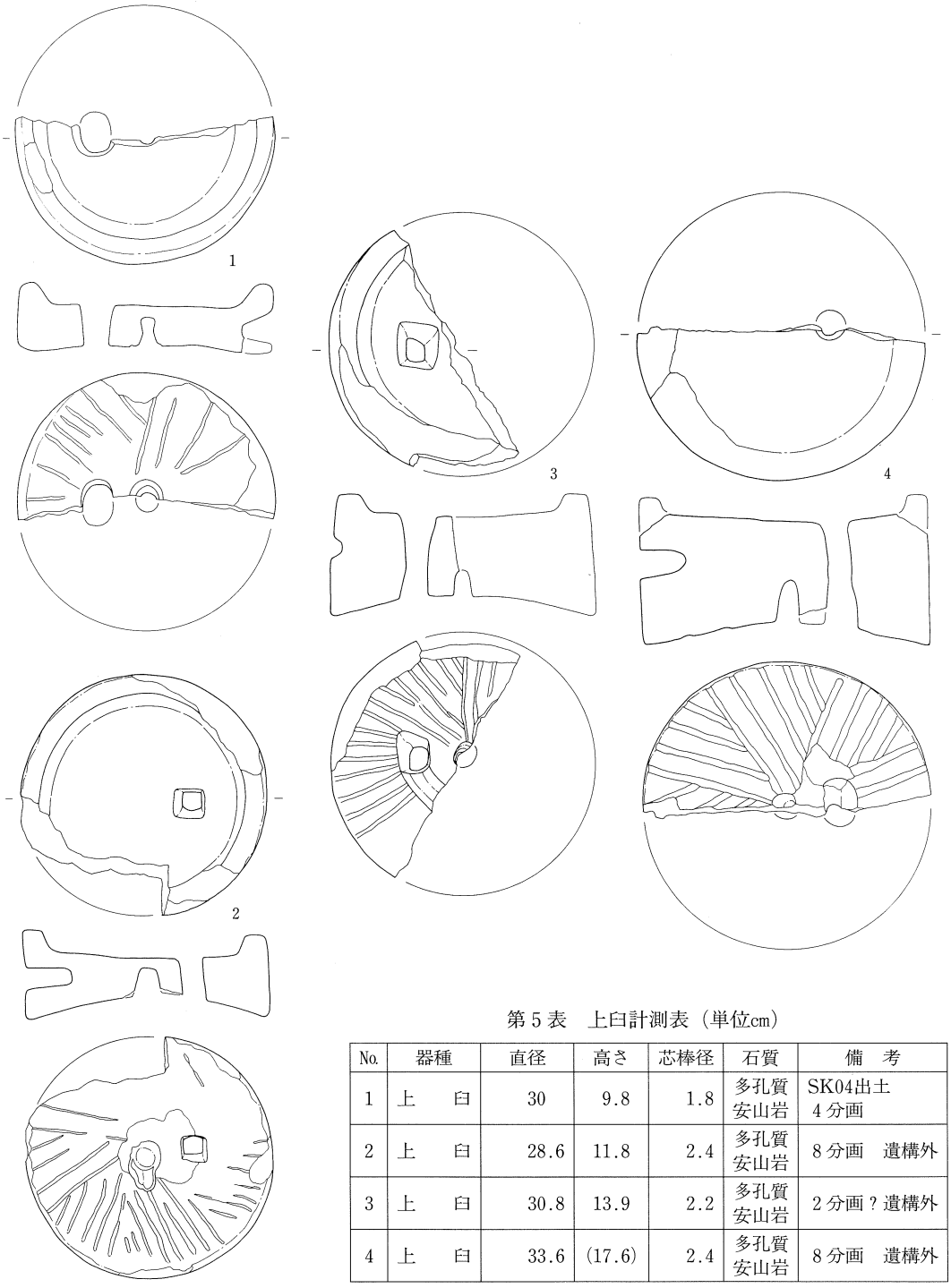


第4表　土器・鉄製品・銭貨・石製品計測表(単位cm)

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	備　考
1	内耳土器					SD02出土
2	小柄の柄頭	4.2	1.5	0.5	8	TA13出土
3	刀　子	9.3	1.4	0.4	19	SD01出土
4	刀　子	19.2	1.5	0.3	31	SK09出土
5	貨　幣			直径 2.4		遺構外
6	貨　幣			直径 2.4		遺構外
7	砥　石	6.5	4.1	3.8 1.9	140	TA05出土
8	砥　石	7.1	2.6	3.6 1.6	63	SA01出土
9	砥　石	7.0	4.3	2.7 0.8	90	SD03出土
10	砥　石	6.8	3.5	4.8 1.3	98	遺構外
11	?	7.1	4.9	2.2	134	TA18出土
12	石　斧	6.7	5.4 4.7	1.5	82	TA18出土
13	石　斧	10.7	4.4 3.7	1.8	125	SA01出土
14	石　斧	9	3.6 2	1.3	60	遺構外
15	石　斧	14.1	7.7 5.5	2.5	410	遺構外
16	石　斧	10.8	6.9 5.5	2.0	191	遺構外

第28図　土器・鉄製品・銭貨・石製品実測図

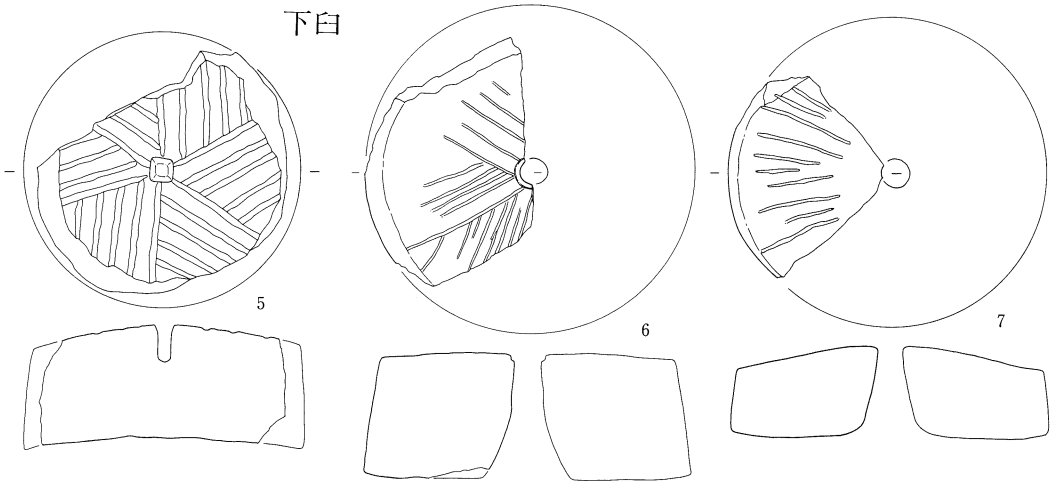
上臼

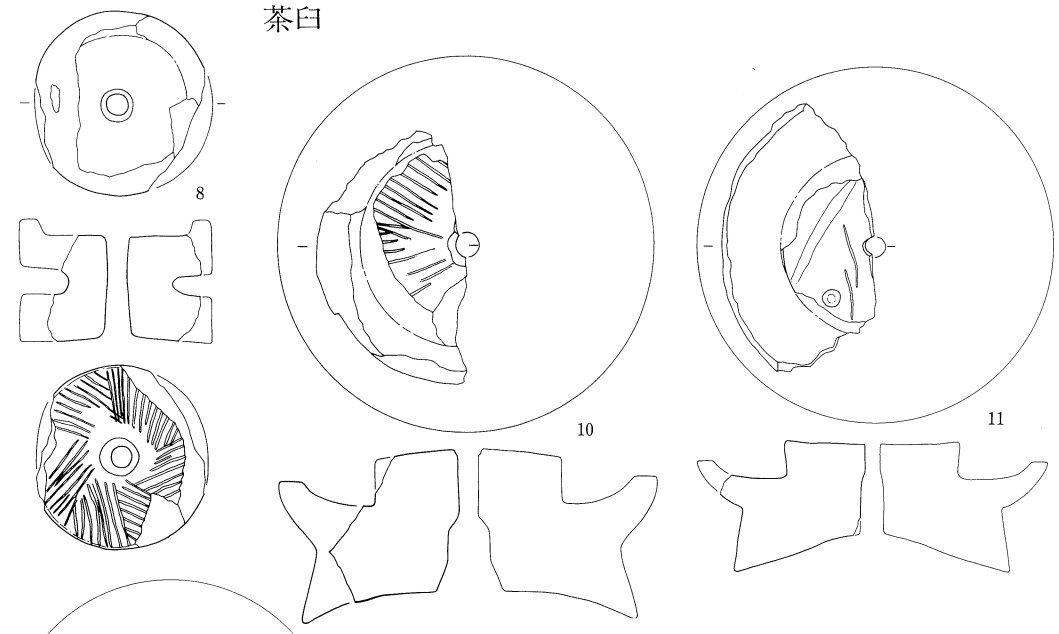


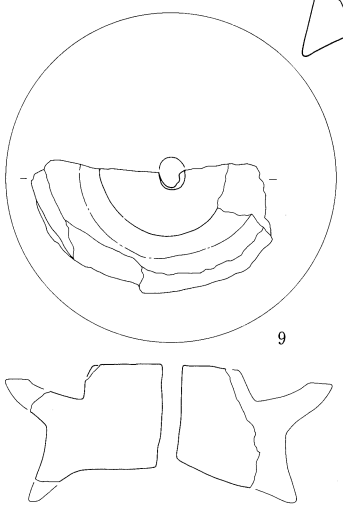
第５表　上臼計測表（単位cm）

No.	器種	直径	高さ	芯棒径	石質	備　考
1	上　臼	30	9.8	1.8	多孔質安山岩	SK04出土 4分画
2	上　臼	28.6	11.8	2.4	多孔質安山岩	8分画　遺構外
3	上　臼	30.8	13.9	2.2	多孔質安山岩	2分画？遺構外
4	上　臼	33.6	(17.6)	2.4	多孔質安山岩	8分画　遺構外

第29図　上臼実測図（１：８）





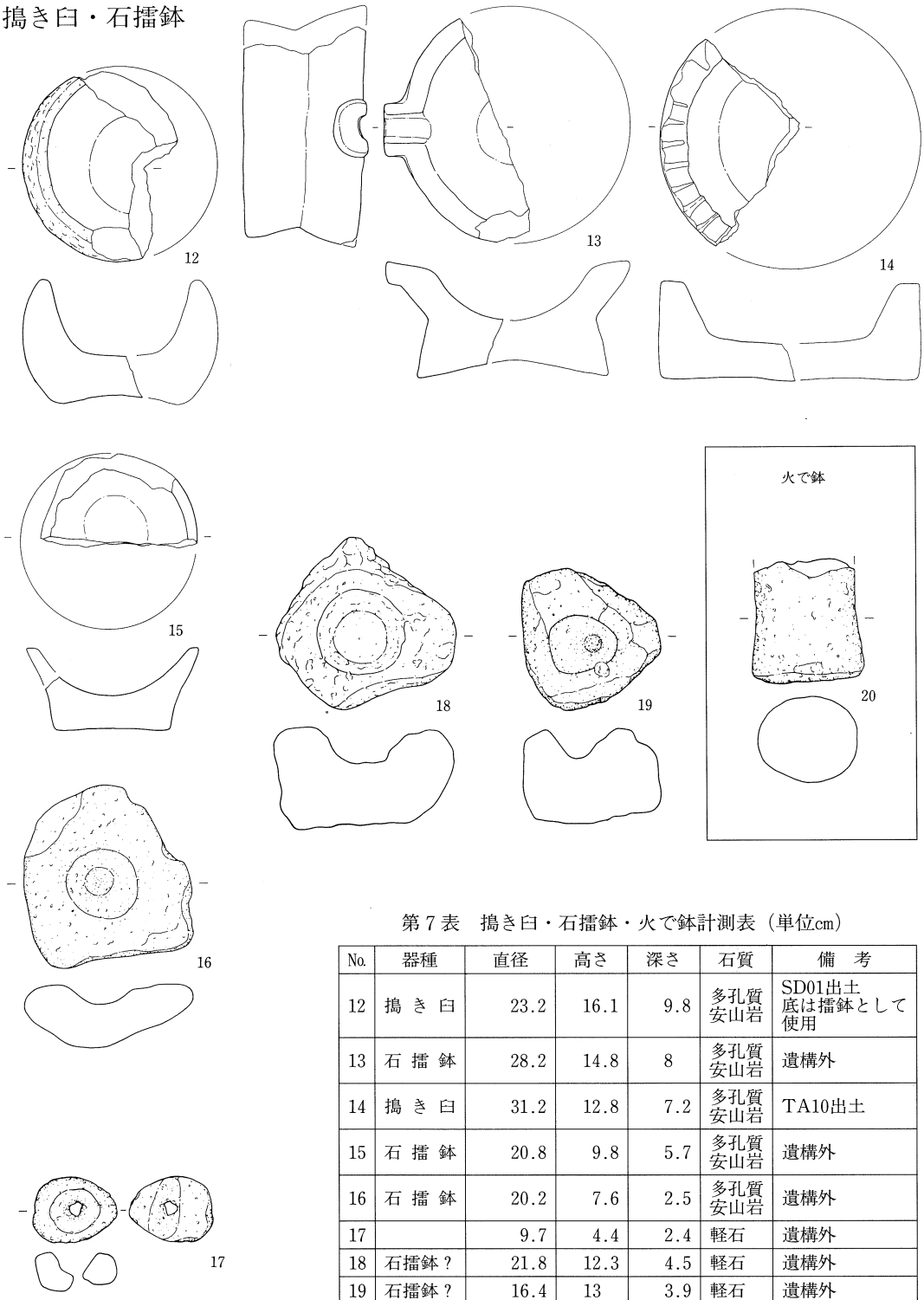


第６表　下臼・茶臼計測表（単位cm）

No.	器種	直径	高さ	芯棒径	石質	備　考
5	下　臼	28.8	12.8	1.8	多孔質安山岩	TA05出土 6分画
6	下　臼	34.4	13.2	2.2	多孔質安山岩	6分画　遺構外
7	下　臼	32.8	10.6	?	多孔質安山岩	放射状？遺構外
8	茶臼上臼	18.8	12.8	2.5	多孔質安山岩	TA10出土 6分画？
9	茶臼下臼	上 18.4 受 34.4	13.2	2.3	多孔質安山岩	遺構外
10	茶臼下臼	上 19.2 受 39.2	16.5	2.2	多孔質安山岩	遺構外
11	茶臼下臼	上 18.4 受 36.4	13.4	1.8	多孔質安山岩	遺構外

第30図　下臼・茶臼実測図（１：８）

搗き臼・石擂鉢



第７表　搗き臼・石擂鉢・火で鉢計測表（単位cm）

No.	器種	直径	高さ	深さ	石質	備　考
12	搗 き 臼	23.2	16.1	9.8	多孔質安山岩	SD01出土 底は擂鉢として使用
13	石 擂 鉢	28.2	14.8	8	多孔質安山岩	遺構外
14	搗 き 臼	31.2	12.8	7.2	多孔質安山岩	TA10出土
15	石 擂 鉢	20.8	9.8	5.7	多孔質安山岩	遺構外
16	石 擂 鉢	20.2	7.6	2.5	多孔質安山岩	遺構外
17		9.7	4.4	2.4	軽石	遺構外
18	石擂鉢？	21.8	12.3	4.5	軽石	遺構外
19	石擂鉢？	16.4	13	3.9	軽石	遺構外
20	火 で 鉢	11	14.7		軽石	遺構外

第31図　搗き臼・石擂鉢・火で鉢実測図

V 総　　括

与良城跡において今回の調査で検出、出土した遺構・遺物については、すでに各章で述べたが、要点を簡単にまとめてみたい。

検出された遺構には、建物址１棟、竪穴住居址２棟、竪穴建物址19棟、土坑７基、土坑墓１基、ピット14基、曲輪１箇所、溝状遺構３基がある。

また、出土遺物には、土器類、石製品、石器、鉄製品、青銅製品、銭貨、人骨、獣骨、炭化物、灰等がある。

遺構は、時期的にみて、中世の城跡に関わるものと、それ以外のものとに分かれる。竪穴住居址２棟は、出土遺物より平安時代前期に比定される。その他の遺構については時期を明記しなかったが、遺構の形状、出土遺物等から中世の所産と考えられる。但し、第１・５号土坑は出土遺物がなかったため、また、第１号建物址に並記した抜け穴状遺構については、遺物の出土は見られたが攪乱等の影響もあり所産期を明らかにすることができなかった。

第１号建物址は「建物址」という聞きなれない分類をしたが、周囲に溝が掘られ、そこから建物の礎石としたと考えられる川原石・礫等が検出されたものの、生活・居住面とした竪穴状の掘り込みが確認されなかったため、竪穴建物址とは一線を画し別の呼称を付けた。

竪穴建物址では、第４・10・12号の３棟において床面の壁際に礫・軽石による石積みが見られた。具体的には、第４号では積まれた石の多くがφ30cmを超す川原石・礫であったのに対し、第10・12号では大半が軽石であった。また、第４号は、東の壁下でカマドが２箇所並ぶかたちで検出され、床面も中央部に向かい傾斜し粘土を多く含む土で叩かれ造られていたことから、他の竪穴建物址とは性格を異にする遺構といえよう。

土坑墓からは、推定年令10歳戦後（性別不詳）の人骨が出土し６枚の渡来銭と面取りした軽石が検出された。曲輪については、後世の浸食等の影響を受けているため断定はできないが、往時は調査時とは形状も異なり、防御の施設が置かれていた可能性が窺える。

溝状遺構は３基が検出された。第１号溝状遺構は、担当者の推測を本文で述べたが、層序の観察から、一旦深く掘ったところに、二重に板塀状のものを建てた跡と思われる。

次に出土遺物についてふれたい。

まず土器であるが、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、陶器、内耳土器、磁器の破片が確認された。縄文土器は、前期の胎土に繊維とパミス、小石を含んだ資料（器種不明）が第２号住居址から、中期後葉の深鉢の口縁部片が、第４号土坑から出土しているが、どちらも混入したものであろう。また、遺構外からは中期中葉から後葉初めにかけての深鉢の口縁部の破片が出土している。弥生土器片は、第５号竪穴建物址から１点、遺構外から数点小片が出土しているが器種は特定できなかった。土師器、須恵器、黒色土器片は遺構内外から出土しているが、図

示し得る資料はなかった。

陶器片は、第2号住居址と第6号竪穴建物址、遺構外から出土している。このうち、遺構外から出土した4点は、いずれも15～16世紀初めの瀬戸・美濃系陶器の破片で灰釉が掛けられていた。磁器片は、13～14世紀の龍泉窯産の青磁の蓮弁文碗の小片が第10号竪穴建物址から出土している。

石製品では、線刻文が施された粘板岩製の硯が、第4号竪穴建物址の貼り床の下から検出された。また、第18号竪穴建物址からは縁に直径9㎜を測る穴が穿たれた用途不明の滑石製の資料が出土した。ほかには、遺構の内外から石臼、搗き臼・石擂鉢、砥石、石剣が出土している。石器では、打製石斧が5点出土したほか、加工痕がみられる黒曜石が2点確認された。鉄製品は刀子が2点、青銅製品では小柄の柄頭が出土している。

銭貨は計8点出土し、このうち6点は第1号土坑墓に埋葬されていた人骨の脇から検出された。欠損のため判別されなかった1点を除き7点は渡来銭であった。

獣骨ではウマの頭部の一部が、、第10号竪穴建物址から出土した。また、炭化物は、第2号溝状遺構から粟が、灰は第13号竪穴建物址から籾の資料が確認された。

以上大変簡略なまとめとなってしまったが、今回の結果を振り返ってみた。

なお、今回の調査で検出された第1号建物址と抜け穴状遺構については、小諸市建設部都市計画課との協議の結果、公園の敷地を当初の計画より狭めることで同意し、遺構に盛土して保存することとした。

最後に、今回の調査・報告書作成にご協力頂いた方々、小諸市都市計画課をはじめとする関係各位、原稿ご教示を頂いた先生方に厚くお礼申し上げ総括としたい。

引用参考文献

小諸市教育委員会　1986　『耳取城跡・古城遺跡』

小諸市教育委員会　1995　『柏木南城跡』

小山岳夫ほか　1991　『金井城跡』　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター

長野県　1998　『長野県史　考古資料編』　長野県史刊行会

付編

小諸市与良城遺跡出土人骨について

長野県野沢南高等学校　田 中 和 彦

出土人骨の個体数は、１個体と推定される。以下に残存する骨の部位についての所見を記載する。

頭蓋骨

前頭骨：上矢状洞溝の縁をつくる稜線が残存している。内板の保存は良いが、外板は剝落と崩壊が著しい。

側頭骨：右側頭骨の岩様部、錘体、鼓室部が残存し、鱗部の下部が残存している。左側頭骨の内耳孔を中心とした錘体部が残存する。乳様突起は小さく表面には酸化鉄様の物質が付着する。

頭頂骨：右頭頂骨、冠状縫合が残存しており、縫合の癒着はない。頭頂結節と鱗縁が残存している。内板の保存状況はよい。外板の表面には酸化鉄様の物質が付着する。

蝶形骨：左蝶形骨大翼の、内板の一部が残存する。

後頭部：外後頭隆起部は外板の剝落が進み不明瞭であるが、発達は弱い。右ラムダ縫合の矢状縫合側約1/3が残存している。内板において横洞溝及び十字隆起部分が残存している。

上顎永久歯

左中切歯：歯冠部および歯根の遠心側約３㎜が残存する。歯冠の近心側のエナメル質が剝落する。

左第２大臼歯：歯根は約6.2㎜ほど形成され、全体の約1/3に相当する。

右中切歯：歯冠部および歯根が５㎜ほど残存する。

右犬歯：歯冠部および歯根が５㎜ほど残存する。

右第１小臼歯：歯冠部および歯根が約６㎜残存する。

右大臼歯：第１大臼歯は歯根が完全に形成されている。第２大臼歯の歯根形成は1/3～2/3程度完了している。

下顎永久歯

左中切歯：歯冠部が残存する。歯根は舌側約４㎜程度を残存する。

左第２小臼歯：歯冠部が残存する。歯根は、約４㎜が残存する。

左中切歯：歯冠部が残存するが、エナメル質は脆く一部剝離する。

右中切歯・側切歯・犬歯：いずれも歯冠部のみが残存し、歯根はほとんど欠失する。

咬　　耗

残存する歯冠の咬耗度はいずれの歯もBrocaの分類では1°、Martinの分類では0°～1°に属する。

Brocaの分類

1°：咬耗がエナメル質にとどまる

2°：咬耗が象牙質に達する

3°：咬耗が歯頸部に及ぶ

の3度に分類している。

Martinの分類

0°：無咬耗

1°：エナメル質のみ咬耗し、咬頭は明確

2°：象牙質が磨滅して各咬頭に孤立的に象牙質が現れるもの

3°：咬合面全部の象牙質の現れるもの

4°：咬耗が歯頸部に及ぶもの

の5度に分類している。

乳　　歯

上顎右第2乳臼歯：歯冠、歯根ともに残存する。頬側の遠心根の近心に吸収面が認められる。

下顎左第2乳臼歯：歯冠、歯根ともに残存するが、近心側の歯冠および歯根が崩壊している。歯冠の舌側のエナメル質が剝落している。近心根の遠心に吸収面が認められる。

咬　　耗

上顎右第2乳臼歯：咬耗が歯冠全体に強く進んでおり、一部象牙質が露出する。

下顎左第2乳臼歯：歯冠の頬側に強い咬耗があり、象牙質が露出する。

残存歯による歯式

		m^2											上顎
M^2	M^1		P^1	C		I^1	I^1				M^2		
				C	I_2	I_1	I_1			P_2			下顎
										m_2			

I^1・I_1：中切歯　　I^2・I_2：側切歯　　C：犬歯

P^1・P_1：第1小臼歯　　P^2・P_2：第2小臼歯　　M^1・M_1：第1大臼歯

M^2・M_2：第2大臼歯　　m^2・m_2：第2乳臼歯

歯の大きさ

歯の大きさは、現代日本人（権田，1959）の男女と比較とすると、いずれの歯種において、近遠心径、頬舌径ともに小さい。特に頬舌径において現代日本人との差がやや大きい。しかし、下顎の中切歯、側切歯の近遠心径は現代日本人とほぼ同じである。また北村縄文（茂原，1993）の男女と比較すると、上下とも近遠心径は北村とほぼ同じか、やや大きい。これに対して、上下いずれの歯種も頬舌径は小さい。

体 肢 骨

鎖骨：右鎖骨遠位端付近が残存。

上腕骨：左右不明。骨体部約125.8㎜が残存する。表面の緻密質は脆く、保存状態は悪い。

大腿骨：左右不明。骨体部約148.7㎜が残存する。表面の緻密質は脆く、保存状態は悪い。

脛骨：右骨体遠位側。約87.8㎜が残存する。脛骨の形状が辛うじて認められる程度の保存状態で、表面は脆い。

腸骨：腸骨の小片と見られる外板が残存する。

椎　　骨

第1頸椎（環椎）：右下関節突起、右の後弓、前弓および歯突起窩

第2頸椎(軸椎)：歯突起、右上関節面、右横突起及び横突孔が残存する。椎体は左後半分が欠失する。

第3頸椎：左下関節突起部及び右横突起部が残存する。

第4頸椎：右横突起が残存する。

ま と め

出土人骨は、1個体のものと考えられる。乳歯が残存することとその歯根の吸収状況、および永久歯の歯根形成の状況から、年齢は10歳前後と推定される。頭蓋骨は側頭骨の一部を除いては、ことごとく砕片となり計測に耐えうる部位が残存していないため、人骨の形態的な特徴による年齢推定は不可能であったが、頭蓋骨の乳様突起、外後頭隆起の発達の状態が弱いこと、厚さが全体的に薄いことを等をあわせると、歯の観察所見による推定年齢とほぼ調和するものと考える。また、性別については、思春期以前の骨については、明瞭な形態学的な性差が認められず、性別の推定は難しく、不確実なものとされている（瀬田・吉野，1990）。本出土人骨の性別を推定するのは、若齢である上に骨の残存状態の悪さから、極めて困難と言わざるを得ない状況である。

参考文献

藤田恒太郎（1995）歯の解剖学　第22版　金原出版株式会社

藤田恒太郎（1984）歯の話　岩波書店

瀬田季茂・吉野峰生（1990）白骨死体の鑑定　令文社

茂原信生（1992）北村遺跡出土の人骨の形質　北村遺跡　長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書14

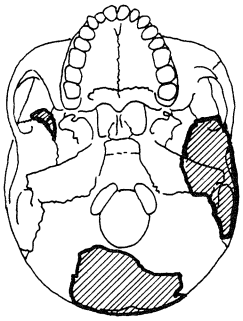
歯の計測値

上顎

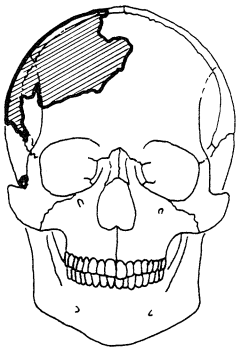
	左 中切歯	左第2 大臼歯	右 中切歯	右 犬　歯	右第1 小臼歯	右第1 大臼歯	右第2 大臼歯	右第2 乳臼歯
81近遠心	……	9	8.3	7.3	6.7	10	9.1	……
81(1)頬舌	6.5	10	6.1	7.6	8.6	10	10.5	9
81(2)歯冠高	9.5	6.5	10.8	10.4	8.5	6	6	……

下顎

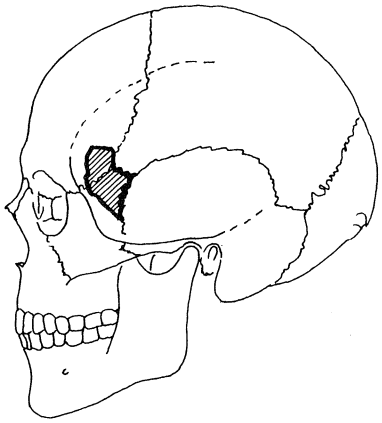
	左 中切歯	左第2 小臼歯	右 中切歯	右 側切歯	右 犬　歯	右第2 乳臼歯
81近遠心	6.1	6.4	5.8	6.3	6	8
81(1)頬舌	5	7.2	……	5.9	6.8	……
81(2)歯冠高	9	7.5	……	6.8	9.9	……



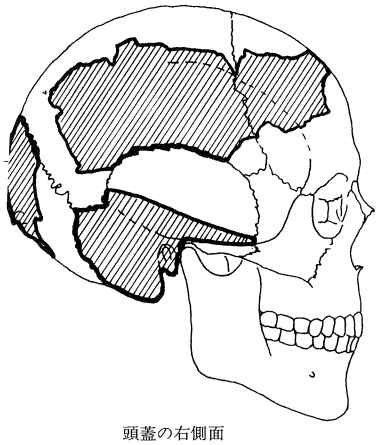
頭蓋骨の下面



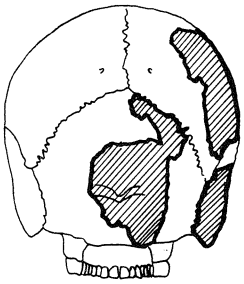
頭蓋の前面



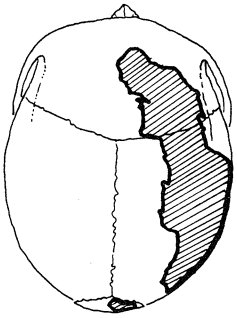
頭蓋の左側面



頭蓋の右側面



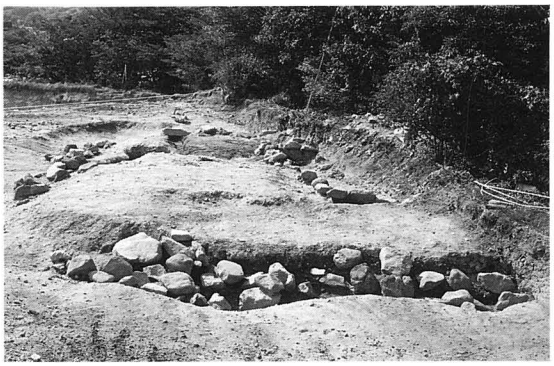
頭蓋の後面



頭蓋の上面

第32図　第１号土坑墓出土人骨部位図

図　　版

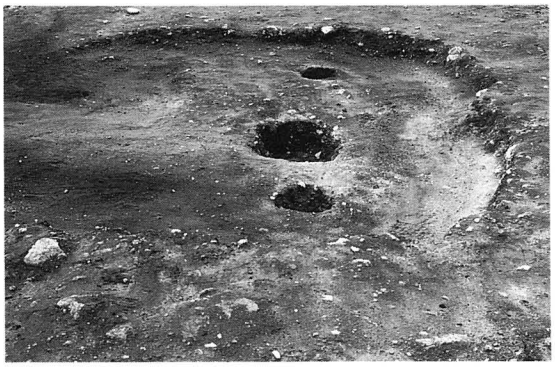


第 1 号建物址

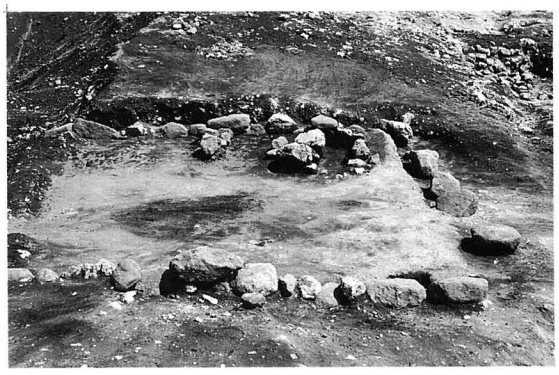
第 2 号竪穴建物址

第 1 号建物址抜け穴開口部

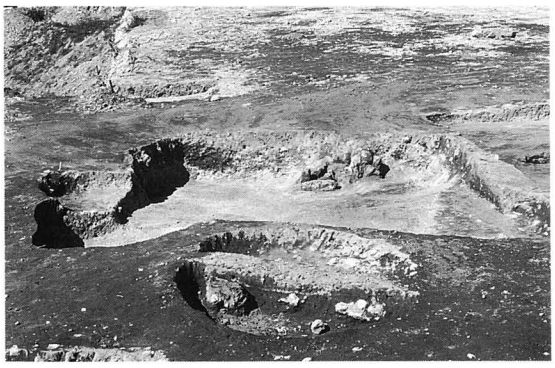
第 3 号竪穴建物址



第 1 号竪穴住居址



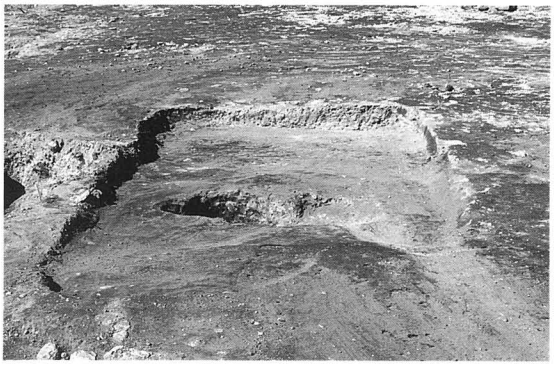
第 4 号竪穴建物址



第 2 号竪穴住居址・第16号竪穴建物址・第 6 号土坑

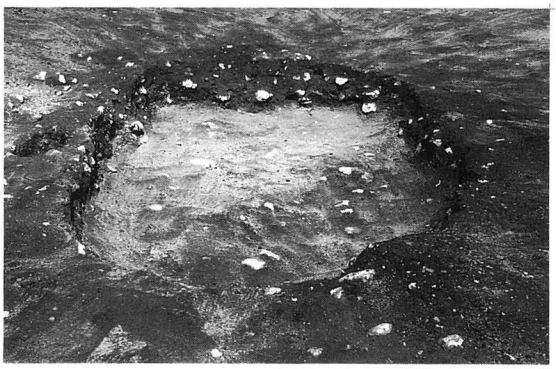
第 4 号竪穴建物址カマド

図版 2



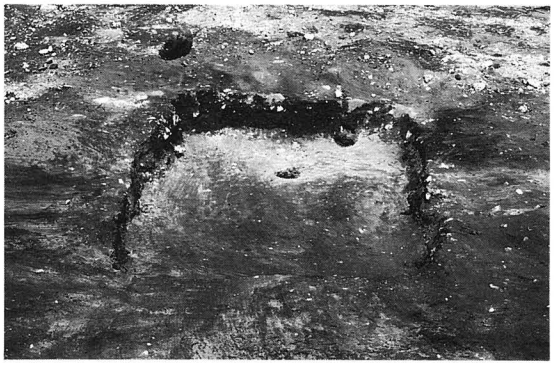
第 5 号竪穴建物址

第 9 号竪穴建物址

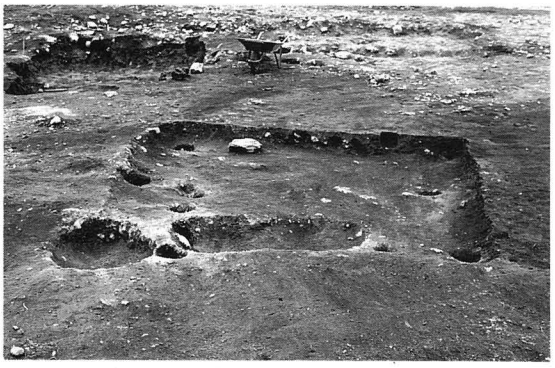


第 6 号竪穴建物址

第10号竪穴建物址

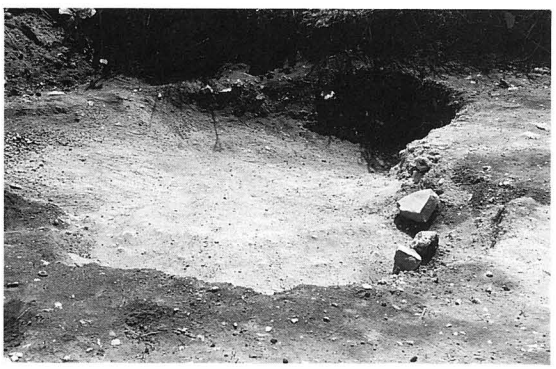


第 7 号竪穴建物址

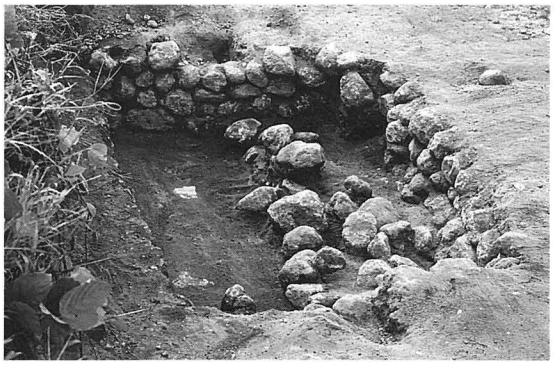


第11号竪穴建物址

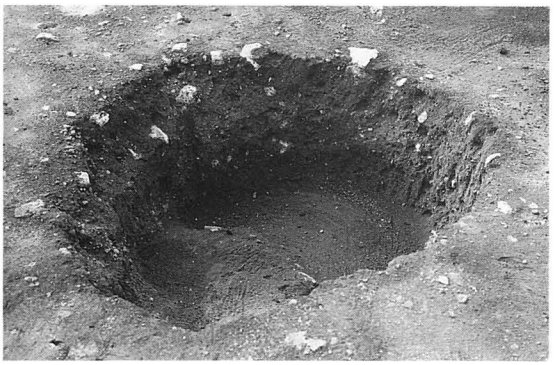
第 8 号竪穴建物址



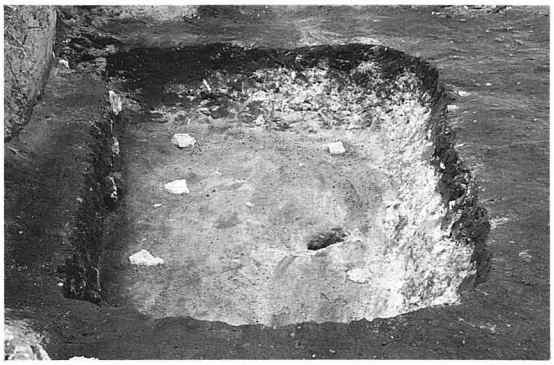
第12号竪穴建物址



第13号竪穴建物址



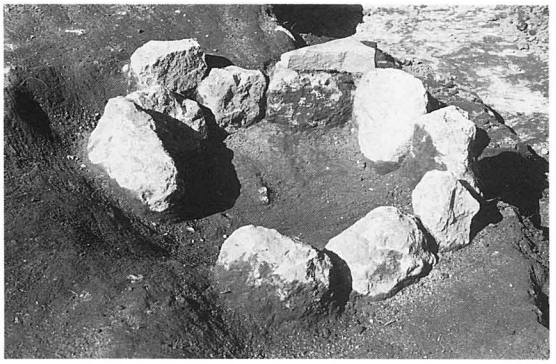
第 1 号土坑



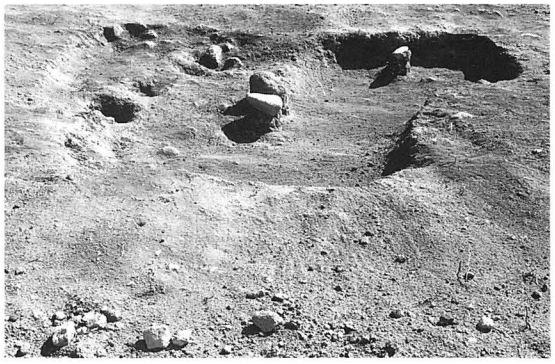
第13号竪穴建物址堀形

第 4 ・ 5 号土坑

第10・18・21・22・23号竪穴建物址



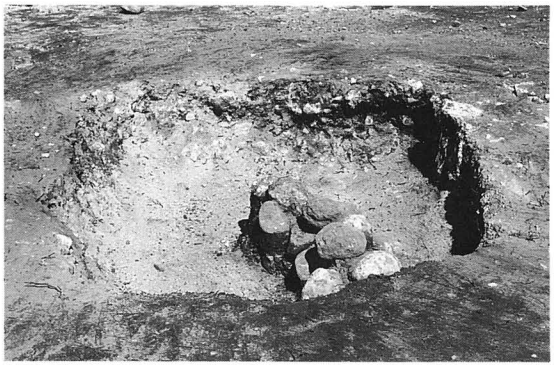
第 6 号土坑



第20号竪穴建物址

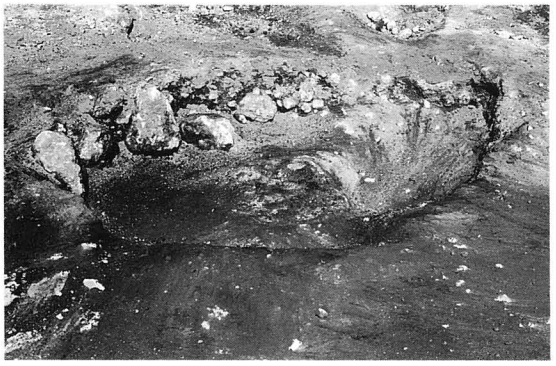
第 7 号土坑

図版 4



第 8 号土坑

第 1 ・ 2 号溝状遺構（南より）



第 9 号土坑

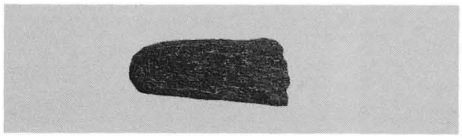
第 1 ・ 2 号溝状遺構（東より）

第 1 号土坑墓

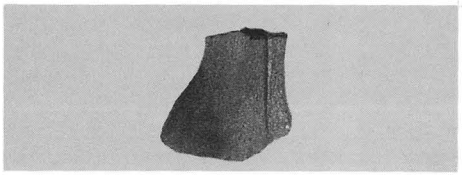
第 3 号溝状遺構

第 1 号ピット群

第 1 号曲輪石積



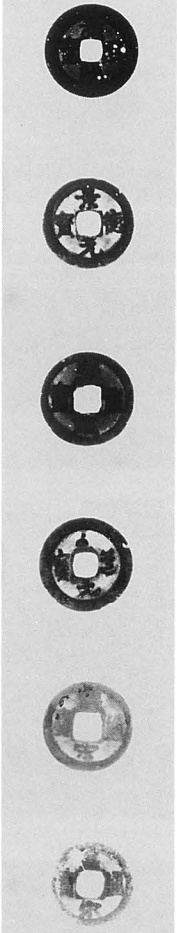
第１号建物址出土石剣

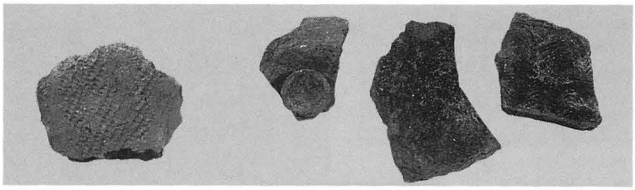


SB01出土　砥石

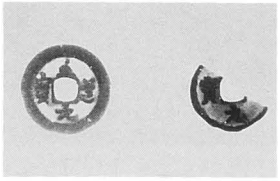
TA04出土　硯

土坑墓出土銭貨
（X線撮影）





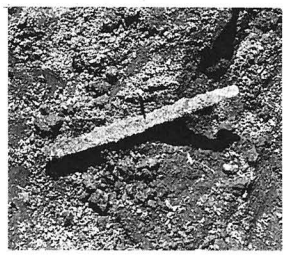
SB02出土　縄文土器片・須恵器片



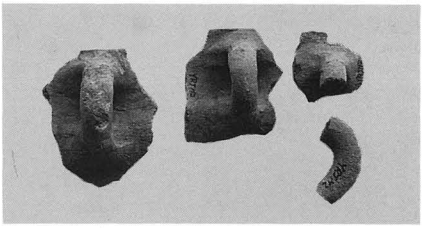
遺構外出土銭貨（28－５・６）
（X線撮影）

（28－２）
TA13出土　小柄の柄頭

SD02出土　内耳土器（28－１）

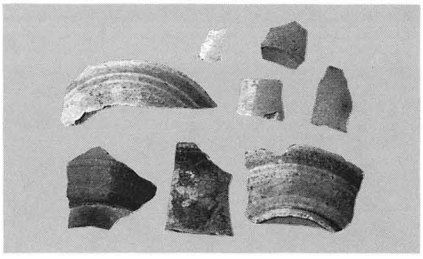


SK09出土　刀子（28－４）



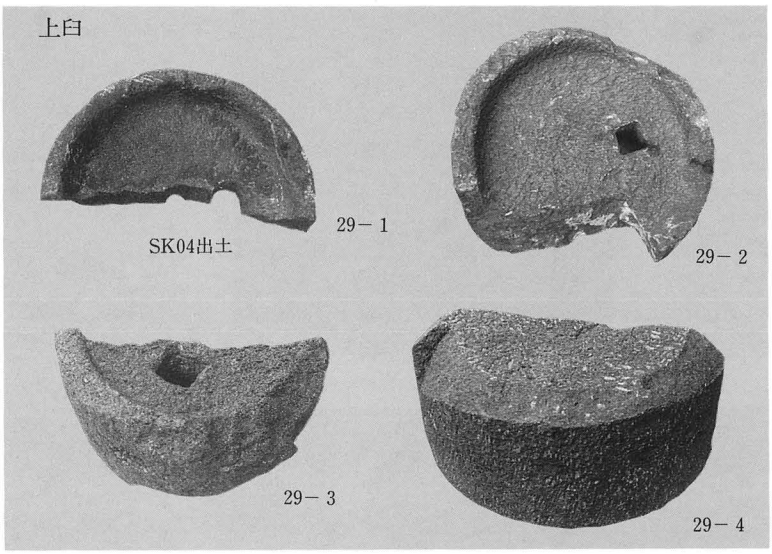
内耳土器把手

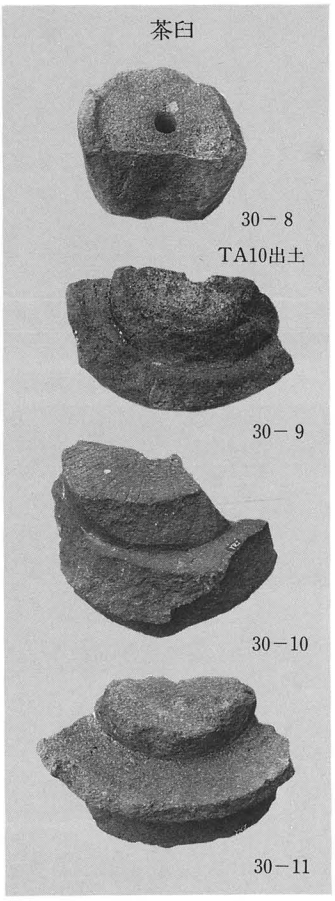
SD02出土　内耳土器

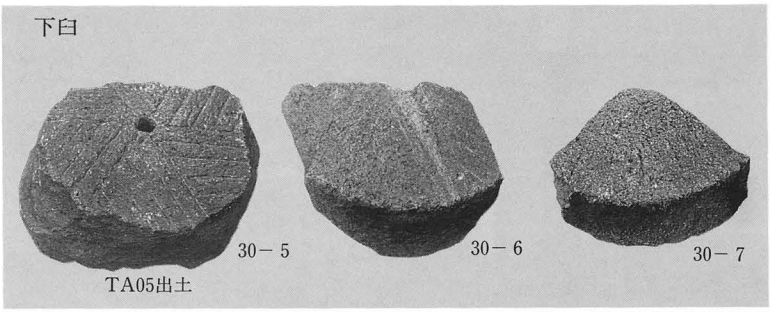


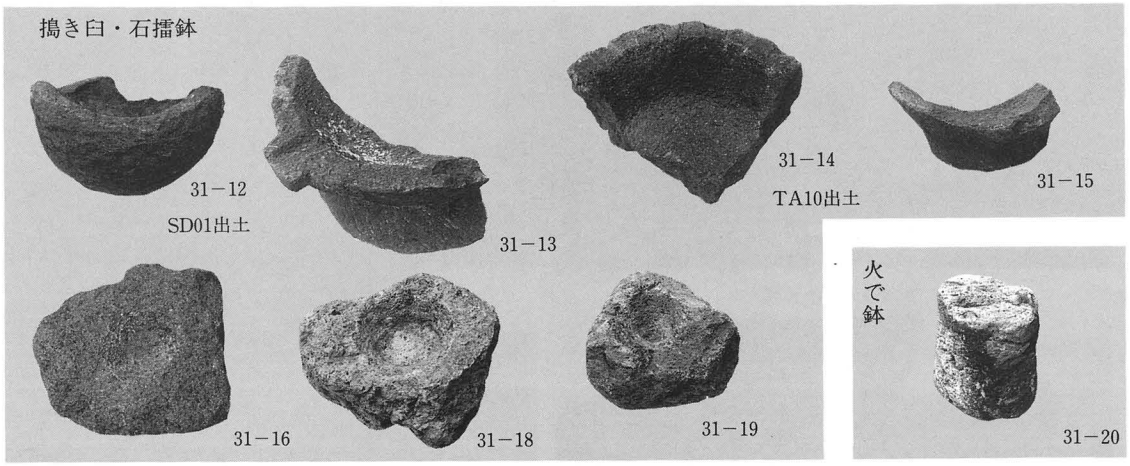
灰釉陶器片

図版 6

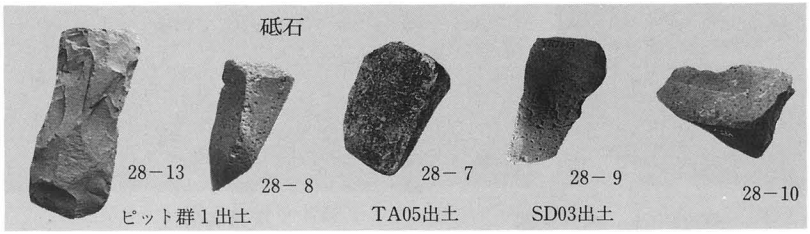

上臼
29－1
SK04出土
29－2
29－3
29－4

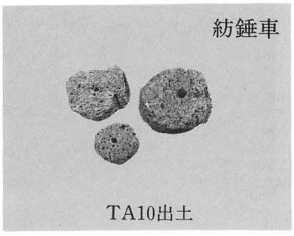

茶臼
30－8
TA10出土
30－9
30－10
30－11


下臼
30－5
TA05出土
30－6
30－7


搗き臼・石擂鉢
31－12
SD01出土
31－13
31－14
TA10出土
31－15
31－16
31－18
31－19

火で鉢
31－20


砥石
28－13
28－8
ピット群１出土
28－7
TA05出土
28－9
SD03出土
28－10


紡錘車
TA10出土

報告書抄録

ふりがな 書名	よらじょうせき 与良城跡
副書名	長野県小諸市与良城跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第29集
編著者名	小淵武一・星野保彦
編集機関	小諸市教育委員会
所在地	〒384-8501　長野県小諸市相生町三丁目3番3号
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よらじょうせき 与良城跡	こもろし 小諸市甲字南城 1862―2外	20208	117	36°18′51″	138°25′40″	平成9年 8月6日 ～ 10月17日	14,000㎡	多目的広場造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
与良城跡	城館址	平安中世	建物址1、竪穴住居址2、竪穴建物址19、土坑7、溝状遺構3	内耳土器、石斧、硯、銭貨8、石臼、揚臼、石擂鉢	

小諸市文化財報告書第29集

与良城跡

―― 長野県小諸市与良城跡発掘調査報告書 ――

1998年3月31日　発行

編集　小諸市教育委員会

発行　小諸市
小諸市教育委員会

印刷　ほおずき書籍株式会社